平成 29（2017）年度

福岡市埋蔵文化財センター年報

第 37 号

2018

福岡市教育委員会

序

アジアに向けて開かれた福岡市は，古来より対外交流の拠点として歴史的に重要な位置を占めてきました。市内にはこのことを示す数多くの遺跡が残され，日々発掘調査が行われています。

市内の発掘調査で出土した膨大な遺物や記録類を適切に保存，収蔵，管理し，また活用していくために，福岡市埋蔵文化財センターは昭和 57 年 2 月に開館しました。以来，二度にわたって増改築を行い，施設の充実に努めてまいりました。平成 28 年 3 月には増加する収蔵資料の保管場所として月隈収蔵庫を取得し，さらに文化財の適切な保管と活用に努めてまいります。

29 年 3 月に国の重要文化財に指定答申がなされた博多遺跡群出土遺物 2138 点は 9 月告示され，正式に指定されました。これを記念し，シンポジウムや講座を実施し，多くの市民の方に博多遺跡群について知っていただきました。

また「庚寅銘大刀」につきましては，今後の展示，活用に向けて，精巧な複製品を制作いたしました。このほか，収蔵品や施設を利用した体験イベント，「収蔵庫暗闇ツアー」や「遺物撮影会」などを新しい試みとして開催いたしました。

最後になりましたが，今後なお一層，福岡市埋蔵文化財センターのご利用をお願いするとともに，関係各位のご指導・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 30 年 12 月 27 日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

目　次

Ⅰ　平成29(2017)年度の活動
1．庚寅銘大刀の複製資料製作について …… 1
2．資料の収蔵・整理 …… 7
3．教育・普及 …… 8
4．保存処理 …… 16
5．入館者数 …… 22
6．平成29(2017)年度当初予算 …… 22
Ⅱ　研究報告 …… 23
1．福岡市内出土石製玉類の用材について …… 23
2．中世イングランドにおけるペニー銀貨の材質調査 …… 32
Ⅲ　埋蔵文化財センターの概要 …… 38
1．組織と職員 …… 38
2．施設 …… 38
付１　福岡市埋蔵文化財センター条例等 …… 40
付２　平成29(2017)年度刊行福岡市埋蔵文化財調査報告書一覧 …… 42

例　言

1.　本書は平成 29 年度 (2017 年 4 月 1 日～ 2018 年 3 月 31 日) の福岡市埋蔵文化財センターの業務年報である。

2.　本書の執筆は，Ⅰ-1・Ⅱ-1 を比佐陽一郎，Ⅰ-3 を大森真衣子，Ⅰ-4 を服部瑞輝と松園菜穂，Ⅱ-2 を松園菜穂・比佐陽一郎・鶴島博和 (熊本大学)，その他を今井隆博が担当し，編集は今井が行った。

＊表紙写真：元岡G-6 号墳出土の庚寅銘大刀（左より復元品，実物，複製品）

Ⅰ　平成 29（2017）年度の活動

1．庚寅銘大刀の複製資料製作について

（1）はじめに

庚寅銘大刀は平成 23 年9月に福岡市西区の元岡 G-6 号墳から出土した鉄刀である。取り上げ直後に行われた透過 X 線調査によって 19 文字の象嵌が発見され、そこに書かれた紀年銘からこの名で呼ばれている資料である。終末期古墳から出土した本資料は、単なる紀年銘に止まらず暦の使用についても研究に一石を投じるものとして、考古学や古代史において大きな意義を持つ発見とされた。資料はその後保存処理が行われ、金象嵌された文字の表出が完了している。

全国的にも貴重な資料である庚寅銘大刀をより広く活用するため、当センターでは平成 28 年度に資料の復元品を製作した。その内容については昨年度のこの年報において報告している。今年度は更に、複製資料の製作を行ったので、ここにその内容を記す。なお、本業務は文化庁による国庫補助事業「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」により実施したものである。

（2）複製について

作業について記す前に、まず複製という資料について示しておきたい。

1）立体二次資料とその定義

複製は博物館資料の二次資料に区分される（千地 1978）。立体の二次資料には他に模造や模型が挙げられる。しかし、これら二次資料の定義は意外にも定まったものはなく、明確ではない現状がある。ここでは各資料の作られ方を中心とした観点から、次のように定める。

複製：印象材を用いて型取りを行い、合成樹脂等でこれを成形し、原資料（元になる一次資料）と同じ色彩を着色し製作される二次資料。

模造：見取りによって原資料の外形、色彩情報を写し取って製作される二次資料。

模型：原資料の情報を抽出、強調、あるいは縮尺を変え製作される二次資料。

他に実物に経時変化が生じている場合に、製作当時の姿に戻したものを「復元」とする。これにも、型取りして製作した資料で復元する複製復元と、見取りによって作られる復元模造がある。特に後者の場合、材料や製作技法まで忠実に再現することで、見た目だけでなく当時の技術の追認という資料的価値が付加される。

複製と模造は型取り作業を伴うか否かが大きな要因であり、その事は、資料の形状における精度や客観性に大きく関与するものである。そして、これらの区分は展示や記録としての二次資料の精度に関わるものとして正しく表示されるべきであり、資料を用いる学芸員がこれらを十分に把握した上で業務に当たることが望ましいと考える。一方で、近年、デジタル分野の急速な発達により、レーザーを用いた三次元計測や X 線 CT のデータを出力する二次資料が広がっている。これらは従来の手作業で作られる立体二次資料とは製作技法が根本的に異なるものであり、新たな区分や定義が必要となると思われる。

2）複製資料の歴史と役割

手作業で作られる博物館資料としての複製の原点は、戦後直後に遡る。昭和 27 年、京都の標本製作会社で、日本で初めて合成樹脂による複製品が製作された（京都科学 1978）。その後、海外に日本の文化財を紹介する万国博覧会などで複製品の需要が高じ、更にバブル経済期の博物館建設ラッシュに伴い広く全国的に普及した。その製作の基本は、貴重な文化財から型を取るにあたって、高い精度を確保しつつ実物資料を傷めない造形技術と、絵の具による彩色でどんな材質のものでも表現できる絵画的な特殊技術である。そのため、製作は専門の業者に委託して行われてきたが、結果として、博物館の中で複製などの外部に委託して製作される二次資料は、資料としての意

義付けが不十分なまま用いられてきた感が否めない。博物館を見る人の複製＝偽物という誤認や、複製を含む二次資料の定義が曖昧なままである原因の一つは、この事が関与していると考えられよう。

複製資料の役割としては、次のようなものが想定される。

① 実物資料の補完

・一次資料が手に入らないが、研究上、または展示の構成上どうしても必要な場合。

・ある特殊な資料の破片があるが、残存率が低く幾通りかの復元案が想定されるような場合に、複製品を用いて復元することで可能性の呈示を行い、不用意に実物に手を加えることを防ぐ。

② 失われる情報の記録保存

・調査や保存処理の過程で実物資料の形状、状態が変化してしまう場合などに、変化する前の状況を記録する。写真や図面よりも臨場感のある記録となる。

（3）庚寅銘大刀の複製

今回実施した庚寅銘大刀の複製製作はこれまで博物館資料に対して行われてきた方法で実施することとした。作業は専門業者（（株）スタジオ三十三）へ委託し行ったものである。

主たる作業工程は次のとおり。

①錫箔による実物の保護

②シリコーンゴムによる型取り（＝雌型の作成）

③エポキシ樹脂 FRP による成形（＝雄型の作成）

④雄型の調整、仕上げ

⑤アクリル絵の具による着色

各工程について細かく見ていきたい。

① 錫箔による実物の保護

型取りに使用するシリコーンゴムは、当初はやや粘度のある液状で、これに硬化剤を適量添加することでゴム状に硬化する。流動性の高い状態で資料に接触し、その細かい凹凸情報を転写した上で硬化するのである。しかし、微細な凹凸の場合、シリコーンゴムが凹みの内部に入り込んで取れなくなったり、直接資料に触れることで含まれる油分が資料に染み込んで残留するといった問題がある。そのためシリコーンゴムが資料と直接触れずに、また細かすぎる凹凸を均す（消す）ことを目的として、資料の表面に錫箔を貼るのである。この錫箔は厚さ５ミクロン前後のものが用いられ、主たる凹凸情報にはほとんど影響が無い。また作業後は剥がし取ることで資料に影響を与えることなく元の状態に戻すことができる。

② シリコーンゴムによる型取り（＝雌型の作成）

型取りは、最終的に型を分割し、実物資料を取り出す必要がある。そのため、資料にまず型の分割面を設定し、その上で、各面ごとに型取り作業を進めていく。今回の対象資料は鉄刀で比較的単純な形状のため、型は刃と峰の部分を分割面とする２分割で作られている。

シリコーンゴムはシート状に塗布されるが、単体ではゴム状で、そのままでは形状を保持することが困難なため、石膏によるバックアップを設ける。分割された型は、石膏同士の噛み合わせによって形状が保持されることになる。なお、シリコーンと石膏で作られた型から実物を取り出す作業は、作業者にとって複製資料製作における全工程の中で最も緊張を強いられる場面といえる。ここで出来上がったシリコーン型は雌型とも呼ばれる。

③ エポキシ樹脂 FRP による成形（＝雄型の作成）

雌型に転写された原資料の凹みにエポキシ樹脂を塗り込み、更に補強のためガラス繊維を積層する。各面、同じ作業を行い、これらを合わせてエポキシ樹脂の硬化を待つ。樹脂の硬化後、再び型を開き、成形品＝雄型を取り出す。

④ 雄型の調整、仕上げ

成型直後の雄型には、型の分割面で成形用樹脂がはみ出したバリや、樹脂に含まれる気泡や樹脂が行き渡らなかったことで生じた微細な孔（ピンホール）が存在する。また、最初の工程で実物保護のために貼った錫箔の皺や重なり目の凹凸も忠実に再転写されている。一方で、シリコーンゴムが噛み込まないように覆った凹みの情報は再現されていない。これらを実物を横に置いて比較しながら、手作業で修正を行う工程が入る。

この工程は次の着色とともに、作業者の技量に

大きく左右される部分となる。また型取り作業とは異なり作業者の主観が入る余地がある工程となっている。これは裏を返せば、発注する側の意図を反映させることが可能な工程とも言える。資料に写すべき情報の取捨選択によって、単に実物に似せるだけではなく意図や目的を明確にした複製資料の製作も可能となる。今回の作業においては特段実物と変わるような部分は無いが、４片に分割している実物と異なり、複製は破片を接合し一体化した状態で製作している。これは活用の便宜を優先させたものである。

⑤　アクリル絵の具による着色

最後にアクリル絵の具を用いて着色が行われるが、これも実物を横に置いて見比べながら、実物に近い色を絵の具の混色によって作りだし、筆やエアブラシを使って塗っていくのである。庚寅銘大刀の中心となる金象嵌部分は、ベースに金箔を貼り文字の形に周囲を塗りつぶし、金泥で細部の修正を行う方法で「描かれて」いる。

（4）おわりに

以上の工程を経て、庚寅銘大刀の複製資料が完成した。そこには実物の形状と色調が高い精度で再現されている。実物資料に代わってその姿を観覧者に伝え、外観情報を記録した資料として将来に伝えるには十分な出来映えである。今後、実物の安全を担保しながら、庚寅銘大刀がより多く人目に触れる機会が増えることが期待される。

なお、今回の製作に用いた（製作で作られた）雌型と、そこから成形された雄型は、複製品の完成品とともに、福岡市埋蔵文化財センターで保管している。保管期間や使用回数には限度があるものの、他の施設で庚寅銘大刀の複製資料が必要になった場合には、既存の型を使用することで実物に負担や危険を及ぼす型取り作業を軽減することが可能であることも付記しておきたい。

また、実物を傷めることなく精度良く型を取り、実物に忠実な彩色を行う技術は一朝一夕に成り立ったものではなく、文化財の保存と活用において貴重なものと言える。デジタル技術を用いた複製品が発達してきた現在でも、特に着色は手作業に及ぶところではなく、形状に関しても出力時の材料の積層ピッチには限界がある。一種の伝統的な文化財保存技術として長く継承されることを切に願うものである。

【参考文献】

京都科学標本株式会社 1978『京都科学標本株式会社 30 年のあゆみ』

千地万造 1978「博物館資料とは」『博物館学講座』5　調査・研究と資料の収集　雄山閣出版

写真 01　錫箔による実物資料の保護（工程①）

写真 02　錫箔に覆われた大刀刀身（工程①）

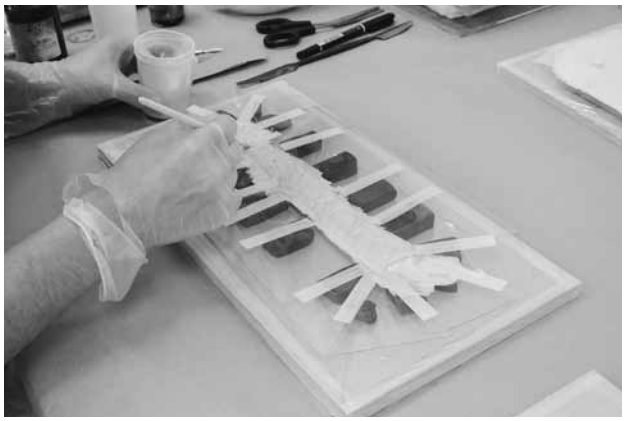


写真 03　型の分割面を設定しシリコーンゴムを塗布（工程②）

写真 04　ガーゼによるシリコーンの補強（工程②）

写真 05　石膏によるバックアップ（工程②）

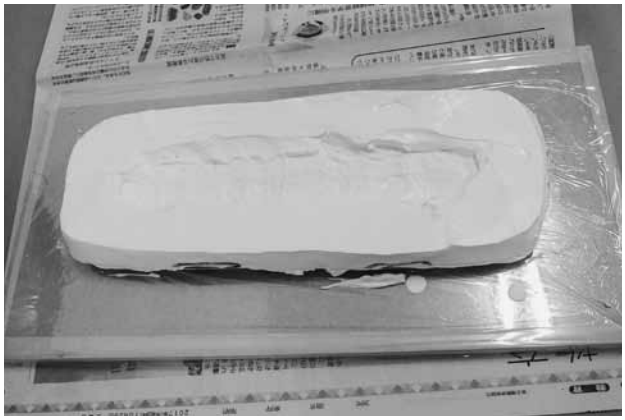


写真 06　同左（工程②）

写真 07　型を外して実物を取り出している所（工程②）

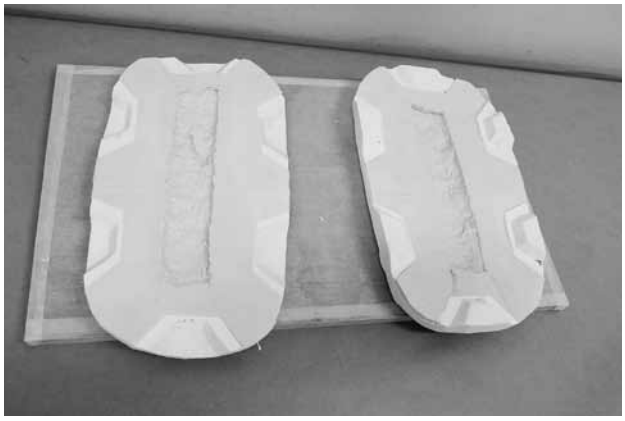


写真 08　実物の凹凸情報が転写された雌型（工程②）

写真 09　雌型へのエポキシ樹脂塗布（工程③）

写真 10　ガラス繊維で補強した状態（工程③）

写真 11　型を合わせクランプで固定（工程③）

写真 12　硬化後成形品を取り出す（工程③）

写真 13　完成した成形品＝雄型（工程③）

写真 14　細部の仕上げ（工程④）

写真 15　アクリル絵の具による着色（工程⑤）

写真 16　同左、象嵌文字の転写（工程⑤）

写真 17　実物（下段）と完成した複製（上段）

写真 18　実物（上段）と完成した複製（下段）

写真 19　象嵌部分の比較　上が複製、下が実物

2．資料の収蔵・整理

（1）収蔵方針

平成 29 年度の福岡市の文化財行政は，経済観光文化局文化財部（組織はⅢ -1 参照）で行っている。福岡市埋蔵文化財センター（以下，センターと呼ぶ）は報告書が刊行された考古資料を発掘調査担当課から受入れて収蔵し，管理することを事業の柱の一つとしている（発掘調査は行っていない）。発掘調査で得られた考古資料は，速やかに一般公開され，広く市民や研究者に活用される事が望ましい。このため文化財部では発掘調査，整理，収蔵の一連の作業が統一性をもって円滑に遂行され，考古資料の多用で迅速な活用をはかるため，昭和 60（1985）年に「埋蔵文化財資料の収蔵整理要項」（『福岡市埋蔵文化財センター年報』第 5 号 1985 所収）を策定した。この要項はその後実状にあわせ細部を改変したものの，策定後から要項に沿った発掘調査，整理作業が実施され，センターへの考古資料の収蔵も円滑なものとなっており，毎年多くの資料が活用されている。

（2）平成 29 年度の本収蔵

センターに本収蔵されている考古資料は，発掘事業担当課が報告書刊行後，要項に沿った整理作業を行い搬入・収蔵したもの（収蔵区分に埋文課等と表記）と，要項策定以前に発掘調査が行われ仮収蔵されていた資料をセンターで要項に沿って整理したうえ収蔵したもの（収蔵区分にセンターと表記）とに区分される。その他に寄贈資料や採集資料も登録して収めている。

平成 29 年度までにセンターに本収蔵されたのは 2,046 遺跡（追加収蔵，寄贈受入まで含めた収蔵数は 2,737 件）で，その内訳は登録遺物 1,320,600 点，甕棺 1,778 個，コンテナ 125,559 箱，ネガフィルム 390,773 点，スライドフィルム 547,868 点，図面類 197,836 枚，写真カード 221,000 枚となっている。平成 29 年度までの市内での発掘調査は 2,561 件であり，全体の約 80%が本収蔵され，検索が可能となった。

平成 29 年度の本収蔵は，埋文課等から搬入・収蔵されたもの 51 遺跡，センターで収蔵したもの 41 遺跡のあわせて 92 遺跡（新規収蔵 38 遺跡，追加収蔵 52 遺跡，寄贈等 2 遺跡）である。主な収蔵品は遺物がコンテナ 2,082 箱と甕棺 3 個（コンテナ換算する場合は甕棺1個を 12 箱とする），写真類が 12,683 点，図面類が 3,938 点，写真カードが 2,178 枚である。

出土品のうち土器・石器は一般収蔵庫に，金属器・木製品・玉類は特別収蔵庫に収納している。また，写真類は第一記録類収蔵庫，図面類は第二記録類収蔵庫，写真カードは第一資料整理室へ納めた。

（3）収蔵棚増設

発掘調査によって増え続ける遺物の収蔵・管理も大きな課題の一つである。本収蔵と仮収蔵を合わせると，年間平均でコンテナケース 5,000 箱が当センターへ搬入され，その収蔵・管理のための場所の確保と収蔵棚の設置に努めている。平成 29 年度は，埋蔵文化財センターに収蔵棚 30 連(棚 8 段)，月隈収蔵庫に 32 連(棚 10 段) を購入した。

本収蔵数一覧（2013 ～ 2017 年度）

年度	収蔵区分	新規遺跡数	追加遺跡数	寄贈・採集受入件数	登録遺物点数	遺物		ネガフィルム			ポジフィルム			デジタル写真（コマ）	図面（枚）		写真カード（枚）
						甕棺（個）	コンテナ（箱）	35mm（本）	6×7（コマ）	4×5（枚）	35mm（コマ）	6×7（コマ）	4×5（枚）		遺構	遺物	
2013	埋文課	40	2	0	20,971	7	1,426	242	3,357	70	6,240	2,225	70	5,229	1,411	1,205	2,154
	センター	5	110	5	7,051	3	702	265	2,643	45	3,837	306	5	2,289	557	238	1,290
	年度合計	45	112	5	28,022	10	2,128	507	6,000	115	10,077	2,531	75	7,518	1,968	1,443	3,444
2014	埋文課	50	12	0	30,517	26	2,987	347	6,916	26	6,844	3,918	59	5,445	1,828	3,617	4,238
	センター	6	65	3	8,735	8	631	69	566	14	1,162	384	14	0	564	411	609
	年度合計	56	77	3	39,252	34	3,618	416	7,482	40	8,006	4,302	73	5,445	2,392	4,028	4,847
2015	埋文課	33	1	0	18,857	19	1,654	336	2,688	11	6,490	2,155	15	4,906	1,142	1,104	1,891
	センター	12	111	34	2,934	-1	298	100	118	91	1,410	292	6	0	122	177	274
	年度合計	45	112	34	21,791	18	1,952	436	2,806	102	7,900	2,447	21	4,906	1,264	1,281	2,165
2016	埋文課	68	8	0	43,851	122	2,696	686	9,477	132	15,869	4,130	176	7,173	3,304	3,218	7,045
	センター	5	73	2	1,825	-2	213	99	768	0	798	598	0	8	114	67	581
	年度合計	73	81	2	45,676	120	2,909	785	10,245	132	16,667	4,728	176	7,181	3,418	3,285	7,626
2017	埋文課	33	18	0	20,589	1	1,919	207	2,262	12	5,124	1,333	12	5,635	1,358	1,764	1,529
	センター	5	34	2	1,946	2	163	131	1,166	0	2,062	367	7	0	320	496	649
	年度合計	38	52	2	22,535	3	2,082	338	3,428	12	7,186	1,700	19	5,635	1,678	2,260	2,178
計	埋文課	1,707	117	0	1,164,560	1,332	107,352	19,560	307,498	3,878	344,625	114,501	2,205	44,319	82,223	87,770	185,931
	センター	339	517	57	156,040	446	18,207	5,890	50,293	3,654	76,055	9,900	582	2,348	13,651	14,192	35,069
	総計	2,046	634	57	1,320,600	1,778	125,559	25,450	357,791	7,532	420,680	124,401	2,787	46,667	95,874	101,962	221,000

３．教育・普及

（1）教育活動

1）出前授業

福岡市の教育方針では、「学ぶことに興味を持ち、未知のものを知る感動を味わい、自由な発想をもって様々なことを構想するなど、知的探求心を高めることや郷土福岡を誇りとする気持ちを育むこと」が重視されている。

このため平成 17 年度から当センターでは、上記の趣旨を生かし、併せて義務教育学校における郷土の歴史学習の充実と拡大を図るための具体的施策として、依頼のあった学校へ当センターの職員（文化財専門職）を派遣し、出土品に直接触れて歴史を身近に感じると共に古代の生活体験をとおして歴史認識を深めることを授業の骨格とする出前授業要項を策定、決定して本格的に事業を開始した。

平成 29 年度授業プログラム実施状況

	授業名（時間）	授業概要	校数（授業数）	人数
1	大昔のくらし①「火起こし」（90分）	道具を用いて２種類の火起こしを体験。火が生活に与えた影響と発火技術の変遷を学習。	2 (5)	165
2	大昔のくらし②「祈りとまじない」（90分）	勾玉を製作体験。祈りの品を用いて昔の人々の生活と想いを学習。	12 (26)	775
3	大陸とのまじわり①「卑弥呼と鏡」（90分）	金属製（低温度溶解金属）の鏡を鋳造製作体験。金属加工等の外来技術をとおして大陸とのつながりを学習。	16 (36)	1186
4	大陸とのまじわり②「木簡を書く」（90分）	木簡を製作体験。鴻臚館跡の出土品に触れ、奈良時代の役人の生活や古代におけるアジアとのつながりを学習。	1 (2)	52
5	職業体験「チャレンジ考古学」（45分）	模型を用いた土器の復元作業や拓本作業を体験。将来の就業に向けた動機付けとして、学芸員業務の一端を学習。	2 (4)	148
合計			33 (73)	2326

「卑弥呼と鏡」授業風景

「祈りとまじない」授業風景

「火起こし」授業風景

2）子ども考古学教室

児童生徒たちが、実際の出土遺物に触れたり、古代の人々の暮らしや技術を追体験したりして、歴史認識を深めることを目的とし、「子ども考古学教室」１回を実施した。

実施日：平成 29 年 8 月 19 日（土）
実施時間：10:00 ～ 12:00
　　13:00 ～ 15:00
内容：鏡の歴史を学び，鋳造作業を行う。
　　合わせて、センター内見学を行う。
受講者数：117 名

子ども考古学教室 実施風景

3）博物館実習

毎年、市内外の大学からの博物館学芸員（補）資格取得を目的とした博物館実習の依頼に登録博物館である本センターは応じている。2017年度も実習生を受け入れて下記のように実施した。

本センターの実習における特徴として、博多駅地下通路に設置されている2箇所の展示施設（fギャラリー）を実際に用いることにある。実習生は二つのグループに分かれ、職員の助言を受け、グループごとに展示計画を立案・検討して作業を進めていく。実習の最終日前日には、前年度の実習生が展示した作品を撤去した後に、実習生が展示を行う。展示された作品は、今後1年間、地下通路を通る人たちの目を楽しませるものとなった。

実習期間：平成29年8月16日～8月30日
実習概要：表参照
実習生　：9名（西南学院大学国際文化学部、福岡大学人文学部歴史学科，筑紫女学園大学文学部、京都美術工芸大学）

	実習内容
8月16日(水)	オリエンテーション センター施設見学 文化財行政と埋蔵文化財センターの役割 展示計画Ⅰ fギャラリー見学
8月17日(木)	遺物の収蔵管理について 遺物の収蔵・整理（実習） 展示計画Ⅱ
8月18日(金)	教育普及・資料の利活用 子ども考古学教室準備
8月19日(土)	子ども考古学教室
8月22日(火)	遺物の保存と活用Ⅰ
8月23日(水)	遺物の保存と活用Ⅱ 展示計画Ⅲ
8月24日(木)	展示計画Ⅳ
8月25日(金)	展示計画Ⅴ
8月26日(土)	展示計画Ⅵ
8月29日(火)	展示準備 fギャラリー展示作業
8月30日(水)	実習を振り返って 教育普及活動について レポート作成

実習生展示①「あなたの知らない匠の技」

実習生展示②「博多と墨と芸術と」

（2）普及活動

1）展示

①常設展示

当センターでは「埋蔵文化財の保存・活用」と「弥生以来の海外交易の拠点都市」を展示の主テーマとしている。

第1展示室では、埋蔵文化財の発掘調査から遺物・記録類が収蔵、管理・活用されるまでの一連の流れと、木器・金属器等の科学的保存処理の成果を「埋蔵文化財とは何か」、「埋蔵文化財の保存処理」、「埋蔵文化財の修復」、「発掘現場での保存科学的作業」、「埋蔵文化財の収蔵管理と活用」、「埋蔵文化財と考古学」、「旧石器・縄文時代の福岡」の項目で展示している。木器・金属器等の科学的保存処理の成果を展示している。

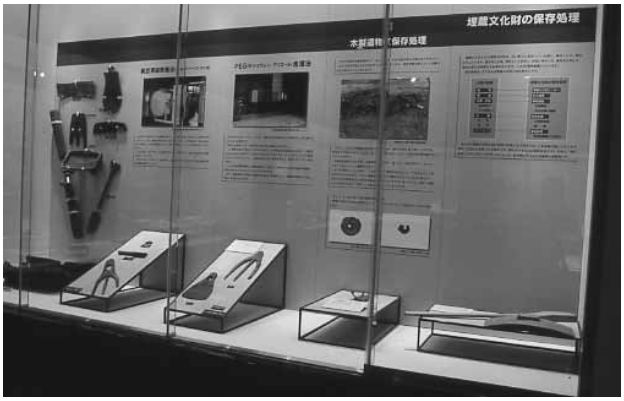
第2展示室では、江戸時代に鎖国されるまで日本の玄関口であり続けた本市の特徴をとりあげ、最も脚光を浴びた「奴国の時代」の弥生時代と国内最大の国際貿易港であった「中世都市博多」の時代に焦点をあて、それぞれ「奴国の拠点集落那珂・比恵遺跡」、「奴国以前」、「大型建物」、環濠・大溝・条溝」、「墳丘墓」、「争う」、「交流と交易」、「祭る」、「装う」、「まかなう」、「つくる」と「日本の玄関・

博多」、「鴻臚館の時代」、「匠」、「海外との交易」、「国内の交易」、「中世博多の情景」、「たしなむ･あそぶ」、「戦乱」の項目でテーマ展示を行っている。

第3展示室は、部門展示室として短期展示を行っており、考古学講座に合わせた企画展、発掘調査速報展・特別展などを実施している。平成29年度は考古学講座「中世博多の考古学」関連企画展を3回、速報講座「甦る出土遺物」関連特別展を1回実施した。

「中世博多の考古学」
第1期：平成29年4月4日（火）
～平成29年7月30日（日）
第2期：平成29年8月8日（火）
～平成29年10月22日（日）
第3期：平成29年10月31日（火）
～平成30年1月21日（日）

特別展「甦る出土遺物」
－平成28年度保存処理成果－
平成30年2月6日（火）
～平成30年5月6日（日）



第1展示室　展示風景

第2展示室　展示風景

第3展示室　第2期展展示風景

第3展示室　「甦る出土遺物」展示風景

②館外展示

本センターでは、出土品の活用の一環として、地域・学校等の身近なところで出土品と接する機会を積極的に設け、市民の文化財保護に対する理解が自然と深まるように努めている。

A ま～るごと博物館

市役所・区役所庁内の各フロアーや地下鉄駅構内に市内遺跡出土品を展示して市民や内外の来訪者が容易に本市の歴史と接する機会を設けたもの。将来的には各建物全体に展示テーマに即した資料を配置して、施設を一巡することで歴史を身近に感じられるようにするものである。平成29年度は博多遺跡群出土品が重要文化財に指定されたことを受けて市役所本庁のロビー展示も短期で実施した。【設置場所】博多駅地下連絡通路

B ふるさと校区博物館

公民館や小学校に小型展示ケースを設置して遺跡から出土した考古資料を展示するもの。特に展示品は各校区内の遺跡から出土したものに限定することにより、生徒や利用者が校区の歴史と容易に接することを可能とした。さらに人々が歴史を身

近に感じることにより、ふるさとを誇りに思える環境のひとつを提供するものである。

【設置場所】三苫小学校／馬出小学校／板付北小学校／野多目小学校／賀茂小学校／城原小学校／西戸崎小学校／福浜小学校／城南小学校／四箇田公民館／老司公民館／金武公民館

賀茂小学校

C 出前博物館

地域商店街や自治会、さらには市内で開かれる各種フェスタ・学会等の主催者と連携して福岡市の歴史理解を深めてもらうことを目的とし、依頼に基づいたテーマに沿った地域短期型の展示会を開催するもの。本センターが企画から展示まで担当し、依頼者はテーマと展示会場の確保だけを担うものである。

グランドホームサンケア和白

文化センター高取

2）公開講座

①考古学講座

平成 29 年度は博多遺跡群出土品が国の重要文化財に指定されたことを記念し「中世博多の考古学」をテーマとした。各方面における研究の第一人者を招き、1回のシンポジウムと7回の講座を開催した。

シンポジウム

回	開催日・講演題	講師名	受講者数
1	平成２９年5月１３日（土） 中世博多歴史放談	小野正敏氏 （国立歴史民俗博物館名誉教授） 佐伯弘次氏 （九州大学大学院教授） 伊藤幸司氏 （九州大学比較社会文化研究院 准教授） 横須賀倫達氏 （文化庁美術学芸課）	246

公開講座

回	開催日・講演題	講師名	受講者数
1	平成２９年6月１０日（土） 博多誕生 ―鴻臚館から博多へ―	山内 晋次氏 （神戸女子大学）	202
2	平成２９年7月２９日（土） 考古学からみる中世都市博多	鈴木 康之氏 （県立広島大学）	208
3	平成２９年9月１６日（土） 博多発掘 40 年のあゆみ	池崎 譲二氏 （元・福岡市埋蔵文化財センター所長）	124
4	平成２９年１０月２１日（土） チャイナタウンのガラス ―博多ガラスの復元―	井上 暁子氏 （日本ガラス工芸学会）	123
5	平成２９年１１月１８日（土） 大航海時代の博多で行き交う金銀 －出土遺物から読み解く金属生産－	沓名 貴彦氏 （国立科学博物館）	161
6	平成２９年１２月１６日（土） 人骨からさぐる中世の博多 ―祇園町出土人骨資料を中心に―	富岡 直人氏 （岡山理科大学）	157
7	平成３０年１月２０日（土） 近世都市博多の成立 －中世との連続と断絶－	宮野 弘樹氏 （福岡市博物館）	149
合計			1,124

シンポジウム風景

②速報講座

当センターにおける平成 28 年度の出土遺物の保存処理成果の紹介、ならびに平成 29 年度における市内発掘調査報告につき、2 回の講座を開催した。

回	開催日・講演題	講師名	受講者数
1	平成３０年２月１７日（土） 甦る出土遺物 平成２８年度保存処理成果から	埋蔵文化財センター職員 （福岡市文化財部）	84
2	平成３０年３月１７日（土） 発掘調査総まくり 平成２９年度市域内調査から	埋蔵文化財課職員 （福岡市文化財部）	108
合計			192

3）資料利用

市民・小中学校・各種博物館・大学などの研究機関・出版社・報道関係などの利用希望に対して、考古資料や記録資料を提供している。資料利用は館内利用と館外利用（貸出）とに分かれる。

貸出期間が 1 年以上のものは長期貸出、未満のものは短期貸出として区分している。

館内利用

利用種類	件　数	点　数
考古資料	144	14,709
写真・記録類	9	53
図　書	218	1467
計	371	16229

館外利用

貸出種類	件　数	点　数		
		考古資料	写真他	合　計
長期貸出	47	2487	31	2518
短期貸出	107	3059	323	3382
計	154	5546	354	5900

4）図書の収蔵と閲覧

①平成 29 年度図書受入状況　計 2082 冊

（一般 1889 冊・雑誌 193 冊）

内訳：購入 132 冊

（一般 2 冊・雑誌 130 冊）

受贈 1950 冊

（一般 1887 冊・雑誌 63 冊）

②平成 29 年度廃棄蔵書数 0 冊

③平成 29 年度末蔵書数 98796 冊

（購入 10200 冊・受贈 88596 冊）

5）施設の利用

当センターでは、申込があれば、講座室や閲覧室を研究会等の各種のイベントや会議等の会場として一般に提供している。

利用種類	件　数	利用者数
試　験	2	22
研究会	9	413
委員会	0	0
会　議	1	8
その他	0	0
計	12	448

6）団体見学・施設見学

当センターでは、学校等の団体に限らずあらゆる方を対象に施設見学を実施している。見学では、職員の解説のもと展示室バックヤードを案内している。

利用種類	件　数	利用者数
学　校	21	467
その他	53	2296
計	74	2763

7）刊行物

①『福岡市埋蔵文化財センター年報第 36 号』 A４版 48 ページ, 平成 29 年 12 月 28 日発行。文化財関係機関・図書館などに配布。

②『見学のしおり（展示案内パンフレット） B４版 3 つ折り 6 ページ。入館者に無料配布。

③『マイコレ』（児童向け収蔵品紹介）

変形A４版 3 つ折り 6 ページ。児童に無料配布。

④『2017 年度講座案内』（チラシ）A4 版 2 ページ。文化財関係機関･図書館などや入館者に無料配布。

8）出前歴史講座

当センターでは、市内各公民館を対象として、依頼のあった施設へ当センターの職員（文化財教育普及専門員）を派遣し、各地域の出土品に直接触れる体験を主体とした「出前歴史講座」を平成 24 年度から実施している。おもに高校生以上成人を対象としているが、夏休み限定として中学生以下児童向けのプログラムも設けている。平成 29 年度は 7 カ所の施設で延べ 9 回実施し、296 名の参加を得た。

9）その他

当センターでは、普及事業の一環としてさまざまなイベントや取組も実施している。平成 29 年度は夏には収蔵庫の利活用を目的とした収蔵庫暗闇ツアーを、冬には収蔵遺物の利活用を図るため遺物写真撮影会を実施した。

① 収蔵庫暗闇ツアー

実施日：平成 29 年 8 月 12 日（土）

参加人数：102 名

概要：ほの暗い収蔵庫を提灯片手に探検してもらうというもの。収蔵庫内の各所に歴史クイズの出題ポイントを設置しており、見て、触れて、福岡市の歴史を身近に感じてもらうことを目的に実施した。

収蔵庫暗闇ツアーポスター

収蔵庫暗闇ツアー実施風景

② 遺物写真撮影会

実施日：平成 30 年 1 月 27 日（土）

参加人数：83 名

概要：収蔵庫内に収めている遺物を自由に写真撮影できるというもの。実物を直接手に持っての撮影や古代衣装を着ての撮影、さらにはトリックアートのような写真撮影ができるなど、遺物に親しんでもらうことを目的に実施した。

遺物写真撮影会風景

遺物写真撮影会風景

遺物写真撮影会実施風景

平成29(2017)年度資料貸出等一覧

件数	区分	申請者	資料名	点数				許可日(貸出日)	備考
				遺物	写真	他	計		
1	A	福岡市博物館学芸課	城ノ原他	1440	0	0	1440	20170401	常設展示
2	A	国立歴史民俗博物館	板付・有田・三筑	25	0	0	25	20170401	常設展示
3	A	大阪府立弥生文化博物館	今山・藤崎・有田他	24	0	0	24	20170401	常設展示
4	A	広島県立歴史博物館	博多陶磁器	6	0	0	6	20170401	常設展示
5	A	焼津市歴史民俗資料館	藤崎58号甕棺	2	0	0	2	20170401	常設展示
6	A	新宮町教育委員会	石丸古川・飯氏ゾウサ土器	3	0	0	3	20170401	町立歴史資料館内常設展示
7	A	リコージャパン株式会社九州支社	比恵25次土器	3	0	0	3	20170401	ロビー常設展示
8	A	グランドホームサンケア和白	唐原土器・展示台	6	0	0	6	20170401	ロビー常設展示
9	A	粕屋町教育委員会	戸原麦尾六花鏡・陶磁器	44	0	0	44	20170401	町立歴史資料館内常設展示
10	A	菊池市教育委員会	博多人骨・陶磁器他	150	0	0	150	20170401	菊池神社歴史館内常設展示
11	A	東京国立博物館	鴻臚館陶磁器	23	0	0	23	20170401	平成館考古展示室常設展示
12	A	市立賀茂小学校	鶴町土器・石器	36	0	0	36	20170401	校内常設展示
13	A	市立馬出小学校	箱崎馬出土器	6	0	0	6	20170401	校内常設展示
14	A・B・C	市立三苫小学校	三苫土器・石器・ケース	69	3	2	74	20170401	校内常設展示
15	A	市立野多目小学校	野多目土器	40	0	0	40	20170401	校内常設展示
16	A	市立城原小学校	拾六町ツイジ	25	0	0	25	20170401	校内常設展示
17	A	市立板付北小学校	板付土器	9	0	0	9	20170401	校内常設展示
18	A	市立西戸崎小学校	海の中道製塩土器他・展示台	15	0	0	15	20170401	校内常設展示
19	A	市立城南小学校	田島B、飯倉C・A遺跡出土品	16	0	0	16	20170401	校内常設展示
20	A	博多区総務部振興課	博多土器・陶磁器他	43	0	0	43	20170401	まちかど文化ひろば「えふギャラリー」展示
21	A	福岡市文化財保護課(鴻臚館展示館)	鴻臚館跡出土陶磁器など	132	0	0	132	20170401	館内常設展示
22	A	福岡市文化財保護課(金隈展示館)	金隈遺跡出土土器	61	0	0	61	20170401	館内常設展示
23	A	福岡市文化財保護課(野方遺跡展示館)	野方遺跡出土遺物	42	0	0	42	20170401	館内常設展示
24	A	福岡市文化財保護課(板付弥生ムラ)	板付遺跡出土遺物	71	0	0	71	20170401	館内常設展示
25	A	群馬県立歴史博物館	藤崎50号甕棺	2	0	0	2	20170401	館内常設展示
26	A	神戸市教育委員会	有田64次甕棺	3	0	0	3	20170401	センター内常設展示
27	A	高口産業株式会社	博多126次白磁他	7	0	0	7	20170401	エントランス常設展示
28	A	市川市立考古博物館	西新町遺跡出土甕棺	2	0	0	2	20170401	館内常設展示
29	A・C	古賀市教育委員会	藤崎遺跡第2次調査出土40号甕棺他	2	0	1	3	20170401	館内常設展示
30	A	東北歴史博物館	有田遺跡群第7次調査出土弥生壺	1	0	0	1	20170401	館内常設展示
31	A	西南学院大学	羽根戸原C遺跡出土須恵器	20	0	0	20	20170401	博物館実習教材
32	A	福岡市博物館管理課	藤崎・徳永遺跡他土器	10	0	0	10	20170401	博物館体験学習
33	A	四箇田公民館	四箇田2次精製土器・十字形石器など	8	0	0	8	20170401	館内常設展示
34	A・C	老司公民館	老司古墳出土埴輪	2	0	2	4	20170401	館内常設展示
35	A・C	金武公民館	展示ケース、吉武遺跡群出土土器・石器	4	0	3	7	20170401	地域住民への吉武高木遺跡普及のため公民館に展示
36	A	茨城県立歴史館	吉武高木・藤崎遺跡出土甕棺	4	0	0	4	20170401	館内常設展示
37	A	九州国立博物館	雀居遺跡出土案など	72	0	0	72	20170401	館内常設展示
38	A	兵庫陶芸美術館	博多遺跡出土磁器	15	0	0	15	20170401	館内常設展示
39	A	独立行政法人都市再生機構九州支社	宝台遺跡出土弥生土器高杯	3	0	0	3	20170401	宝台団地内管理事務所に常設展示
40	A	戸切人権のまちづくり館	戸切遺跡出土須恵器杯他	24	0	8	32	20170401	館内常設展示
41	A	ダイワロイヤル株式会社	博多遺跡出土陶磁器他	27	0	0	27	20170401	ホテル内常設展示
42	A	九州歴史資料館	元岡桑原遺跡群編みかご	1	0	0	1	20170401	館内常設展示
43	A・C	福岡市教育センター	羽根戸古墳群出土品	48	0	2	50	20170401	館内常設展示
44	A	西日本鉄道株式会社	博多28次出土品	3	0	0	3	20170401	西鉄祇園ビルエントランスに展示
45	D	一般財団法人Plenus日本の心研究所	板付遺跡　弥生人の足跡他	0	2	0	2	20170404	ホームページに掲載
46	C	福岡市文化財保護課	火起こしセット	0	0	6	6	20170406	イベントに使用
47	B	株式会社ビデオステーションキュー	梅林古墳出土土師器・須恵器集合他	0	2	0	2	20170407	番組制作に使用
48	A	個人	雀居遺跡第5次調査出土石斧他	26	0	0	26	20170407	大学授業に使用
49	A	個人	席田大谷遺跡第5次調査出土金環他	135	0	0	135	20170407	大学授業に使用
50	E	NHKエデュケーショナル	雀居遺跡第12次調査出土弥生土器甕他	1	0	0	1	20170411	講義解説に使用
51	B	ジーグレイプ株式会社	福岡城跡第48次調査出土軒丸瓦	1	0	0	1	20170411	書籍に掲載
52	D	NHKエデュケーショナル	板付遺跡出土農具他	0	3	0	3	20170411	テレビ番組にて使用
53	B	博多ガイドの会	博多遺跡群発掘調査風景他	0	33	1	34	20170413	遺跡案内に使用
54	B	株式会社ビデオステーションキュー	梅林遺跡第1次調査　壁立ち式建物他	0	5	0	5	20170418	テレビ番組にて使用
55	D	一般財団法人日本原子力文化財団	橋本一丁田遺跡出土木製農具	0	1	0	1	20170420	月刊誌に使用・掲載
56	D	博物館事業管理都市史編さん室長	飯氏二塚古墳玄室写真他	0	4	0	4	20170428	市史だよりに掲載
57	B	個人	板付遺跡出土弥生土器他	0	2	0	2	20170511	書籍出版に使用
58	B	有限会社アート・エフ	福岡市西区拾六町ツイジ遺跡出土　堅杵	0	1	0	1	20170511	問題集に使用
59	A	三原市教育員会	名島城跡出土　軒平瓦	2	0	0	2	20170512	出展のため
60	A・B	国立中央博物館	比恵遺跡出土　鋳造鉄斧他	2	1	0	3	20170519	出品、掲載に使用
61	A	一般財団法人　熊本伝統工芸館	庚寅銘大刀他	2	0	0	2	20170519	展示に使用
62	D	学校法人　河合塾	堅杵(拾六町ツイジ遺跡出土)	1	0	0	1	20170519	大学受験教材に使用
63	D	NHKエデュケーショナル	『最古の農村』図29幹線水路他	0	5	0	5	20170519	教材として使用
64	E	NHKエデュケーショナル	雀居遺跡第12次調査出土弥生土器甕他	3	1	0	4	20170519	講義解説に使用
65	A	九州国立博物館	箱崎遺跡出土　青白磁合子他	8	0	0	8	20170523	展示に使用
66	B	今津公民館	今津元寇防塁写真パネル	0	1	0	1	20170521	展示に使用
67	D	株式会社　フォト・オリジナル	板付遺跡出土石包丁	0	1	0	1	20170524	掲載に使用
68	D	長崎国際大学	比恵遺跡群6次調査出土壺型土器他	0	2	0	2	20170524	問題集作成に使用
69	A・B	荒神谷博物館	野方久保遺跡5号甕棺出土銅剣他	18	27	0	45	20170524	掲載に使用
70	D	一般財団法人Plenus　日本の心研究所	板付遺跡18次出土炭化物	0	1	0	1	20170530	HP掲載・展示パネルに使用
71	B	個人	鍬復元品他	0	6	0	6	20170607	配信に使用
72	E	東北歴史博物館	有田遺跡群第7次調査出土　壺形土器	1	0	0	1	20170607	掲載に使用
73	D	脂後象嵌	元岡・桑原遺跡第56次調査出土庚寅銘大刀他	0	2	0	2	20170614	ブログに使用
74	D	株式会社学研アソシエ	板付遺跡出土　弥生土器(壺)他	0	2	0	2	20170614	掲載に使用
75	A・C	西都校区自治協議会	徳永A遺跡1次調査出土陶磁器他	7	0	2	9	20170615	展示に使用
76	A	島根県立古代出雲歴史博物館	博多遺跡群第40次調査(4号土壙)出土遺物	16	0	0	16	20170623	展示に使用
77	A	弘前大学人文社会科学部	板付505号線1次第11号袋状竪穴出土イネ他	161	0	0	161	20170623	需要と歴史的展開の解明

件数	区分	申　請　者	資　料　名	点　数				許可日（貸出日）	備　考
				遺物	写真	他	計		
78	D	NHKエデュケーショナル	雑餉隈遺跡の壺と磨製石剣	0	1	0	1	20170706	授業内で使用
79	B	株式会社世界思想社共教学社	板付遺跡出土土器集合写真	0	1	0	1	20170712	掲載に使用
80	B	株式会社　新泉社	吉武大石遺跡53号甕棺墓出土銅戈	0	1	0	1	20170712	掲載に使用
81	A･B	春住小学校	比恵遺跡8次調査出土弥生土器他	4	1	0	5	20170707	学習教材に使用
82	D	株式会社東京堂出版	宝満尾遺跡出土　ガラス玉首飾り	0	1	0	1	20170719	説明図版として使用
83	D	太宰府市文化ふれあい館	比恵遺跡群8次調査の倉庫群	0	1	0	1	20170719	展示･講座･HP掲載に使用
84	D	数研出版株式会社	三筑遺跡出土石包丁	0	1	0	1	20170719	掲載に使用
85	B	博多ガイドの会	博多一括廃棄資料他	0	9	0	9	20170719	ガイドに使用
86	E	別府大学文学部史学･文化財学科	青銅器鋳型他	9	0	0	9	20170721	製品との比較検討に使用
87	E	公益財団法人唐津市文化事業団	比恵遺跡出土匙他	10	0	0	10	20170721	掲載に使用
88	A	博物館学芸課長	鴻臚館4次鬼瓦他	313	0	0	313	20170729	展示･掲載に使用
89	A	博物館学芸課長	古代衣装	4	0	0	4	20170729	着用体験で使用
90	D	株式会社　正進社	城ノ原遺跡出土壺形土器	0	1	0	1	20170729	掲載に使用
91	D	山口大学人文学部	鋤先古墳群A群3次調査写真	0	1	0	1	20170804	掲載に使用
92	A	公益財団法人元興寺文化財研究所	鴻臚館23次調査出土　小札および鉄鏃他	18	0	0	18	20170804	展示･掲載に使用
93	A･B	九州歴史資料館	名島城跡1次調査出土軒平瓦他	8	2	0	10	20170804	掲載に使用
94	A	国立歴史民俗博物館	有柄式銅剣を模倣した木剣	1	0	0	1	20170814	掲載に使用
95	A･B	大阪府立弥生文化博物館	海ノ中道遺跡出土製塩土器他	26	3	0	29	20170816	展示･掲載に使用
96	B	株式会社　中央公論新社	吉武高木遺跡3号木棺墓の副葬品	0	2	0	2	20170816	掲載に使用
97	B	株式会社　天夢人	比恵遺跡群出土弥生時代前期の壺	0	1	0	1	20170816	掲載に使用
98	E	杵築市教育委員会	拝塚古墳出土囲形埴輪他	3	0	0	3	20170906	図録作成に使用
99	A･B	大阪府立近つ飛鳥博物館	西新町遺跡朝鮮半島系土器他	85	65	0	150	20170801	展示･掲載に使用
100	A	大韓民国国立済州博物館	碇石	1	0	0	1	20170906	展示に使用
101	D	株式会社　学び舎	博多遺跡群出土磁器集合写真	0	1	0	1	20170906	掲載に使用
102	A･C	西都公民館	徳永A遺跡1次調査出土陶磁器	7	0	2	9	20170730	展示に使用
103	B	季刊誌旅鶴　編集室	元岡･桑原遺跡群出土環頭大刀	0	1	0	1	20170912	掲載に使用
104	B	奈良県立橿原考古学研究所	拾六町ツイジ遺跡出土木製品	0	2	0	2	20170912	上映に使用
105	D	公益財団法人　元興寺文化財研究所	雀居遺跡5次調査出土紡錘車他	0	4	0	4	20170926	掲載に使用
106	B	株式会社　かみゆ	単鳳環頭太刀他	0	5	0	5	20170926	掲載に使用
107	A･B	兵庫陶芸美術館	板付遺跡出土壺等	10	10	0	20	20170928	展示･掲載に使用
108	B	株式会社　雄山閣	比恵遺跡群31次調査検出道路上遺構他	0	2	0	2	20170928	論考に使用
109	A	株式会社　新泉社	博多遺跡群出土石鍋	1	0	0	1	20171003	掲載に使用
110	A･B	杵築市教育委員会	鋤先古墳出土埴輪他	5	4	0	9	20171005	展示に使用
111	D	一般財団法人　放送大学教育振興会	那珂遺跡37次調査環濠他	0	1	1	2	20171011	掲載に使用
112	B	株式会社　吉川弘文館	博多遺跡群出土天目碗	0	1	0	1	20171013	掲載に使用
113	A･B	博物館学芸課長	三つ鱗紋入り土製円盤他	1	2	0	3	20171019	展示に使用
114	A･B	博物館学芸課長	高畑遺跡8次調査出土木簡他	74	24	0	98	20171011	展示･掲載に使用
115	B	博多ガイドの会	博多遺跡群124次一括遺構	0	1	0	1	20171017	ツアー資料として使用
116	A	高取焼味楽窯	福岡市内出土高取焼	136	0	0	136	20170831	展示に使用
117	D	株式会社　山川出版社	拾六町ツイジ遺跡出土堅杵	0	1	0	1	20171107	掲載に使用
118	B	福岡県教育庁総務部	発掘調査報告書第391集掲載写真	0	6	0	6	20171025	ポスター及び動画映写に使用
119	A	桑原町内会長	庚寅銘大刀他	34	0	0	34	20171102	展示に使用
120	A	熊本大学大学院人文社会科学研究部	脇山遺跡出土縄文土器	1303	0	0	1303	20171114	土器圧痕調査に使用
121	B	株式会社　フリーノート	鴻臚館跡出土中国陶磁器集合	0	1	0	1	20171127	掲載に使用
122	B	毎日新聞福岡本部	博多遺跡群出土ガラス関連遺物写真	0	1	0	1	20171130	掲載に使用
123	E	韓国放送局KBS	西新町遺跡出土板状鉄斧他	2	0	0	2	20171008	放映に使用
124	A	博物館学芸課長	黒曜石原石他	86	0	0	86	20171205	展示･掲載に使用
125	A	経済観光文化局文化財部	中国産青磁他	366	0	0	366	20171208	展示･掲載に使用
126	E	島根県教育庁文化財課	比恵遺跡8次調査出土須恵器他	5	0	0	5	20171226	掲載に使用
127	B	株式会社　雄山閣	重留遺跡窯跡全景写真	0	2	0	2	20171226	掲載に使用
128	D	一般財団法人東京大学出版会	藤崎遺跡出土壺型土器	0	1	0	1	20180109	掲載に使用
129	D	個人	実測図:香椎A遺跡1次調査	0	0	2	2	20180109	発表資料として使用
130	B	NHK文化放送センター名古屋総支社	板付遺跡の水田稲作に伴う土器群の写真	0	1	0	1	20180115	掲載に使用
131	D	国立歴史民俗博物館	博多遺跡群出土ガラス坩堝他	0	2	0	2	20180124	掲載に使用
132	D	株式会社　河合出版	拾六町ツイジ遺跡出土　堅杵	0	1	0	1	20180124	掲載に使用
133	D	個人	鍬復元品他	0	5	0	5	20180124	掲載に使用
134	B	株式会社　グレイル	吉武高木遺跡全景	0	2	0	2	20180208	掲載に使用
135	B	琉球新報社	滑石製石鍋	0	1	0	1	20180123	掲載に使用
136	B	国立歴史民俗博物館	那珂遺跡環濠集落他	0	10	0	10	20180216	展示に使用
137	D	(公社)農業農村工学会	収蔵倉庫内風景	0	1	0	1	20180222	掲載に使用
138	B	株式会社　吉川弘文館	雀居遺跡出土鍬の発掘状況他	0	2	0	2	20180216	掲載に使用
139	D	株式会社　帝国書院	木製鋤復元品	0	1	0	1	20180222	掲載に使用
140	D	個人	福岡市埋蔵文化財センターHP公開写真	0	3	0	3	20180223	掲載に使用
141	B	個人	拝塚古墳出土盾持埴輪	0	5	0	5	20180226	掲載に使用
142	A	九州国立博物館	弥生土器	6	0	0	6	20180306	展示に使用
143	A	九州国立博物館	金武城田遺跡2次調査出土土師器他	11	0	0	11	20180306	展示に使用
144	B	株式会社　雄山閣	板付遺跡水田水口の堰	0	2	0	2	20180226	掲載に使用
145	D	株式会社　雄山閣	雀居遺跡出土弥生土器	0	8	0	8	20180226	掲載に使用
146	D	大分県埋蔵文化財センター	博多遺跡群第111次調査出土メダイ	0	1	0	1	20180313	掲載に使用
147	D	個人	福岡市埋蔵文化財センターHP公開写真	0	3	0	3	20180313	掲載に使用
148	D	株式会社　悠工房	板付遺跡出土石包丁	0	1	0	1	20180309	掲載に使用
149	B	株式会社　敬文舎	博多遺跡群出土墨書土器集合	0	1	0	1	20180316	掲載に使用
150	B	株式会社　吉川弘文館	博多遺跡群111次調査出土遺物	0	2	0	2	20180316	掲載に使用
152	A	経済観光文化局博物館事業管理部	製塩土器他	84	0	0	84	20180330	展示･掲載に使用
153	B	博物館事業管理部	調査報告書第184集　242頁　Fig.342	0	1	0	1	20180330	掲載に使用
154	D	福岡県農林水産部福岡の食販売促進課	板付遺跡30次水田遺構他	0	3	0	3	20180330	掲載に使用
			計	5546	322	32	5900		

※A:遺物貸出、B:写真貸出、C:その他の貸出、D:図面･写真等の使用、E:遺物撮影

４．保存処理

（1）はじめに

当センターでは昭和 57 年の開館以来、市内出土埋蔵文化財のうち腐蝕や劣化により資料としての取り扱いや、通常の保管が困難なもの（主に対象となるのは木製品と金属製品）について、保存のための科学的処置を講じている。当初は直接的な処置のための限られた機器で作業を行ってきたが、平成 11 年度の増築により事前調査機器や大型の処理装置などが導入され、幅広い資料に対応が可能となっている。増築前後の施設の内容については、年報の第 15 号（増築前）、18 号（増築後）をそれぞれ参照されたい。

（2）有機物（出土木製品）

1）保存処理の概要

今年度処理を行ったのは5遺跡 337 点である。この内、元岡・桑原 42 次の 32 点、今宿五郎江 11 次の 35 点、久保園 4 次の 9 点、高畑 20 次の 2 点、井相田 C11 次の 42 点計 120 点は国庫補助事業によるものである。

処理方法は資料の大きさ、構造、樹種、劣化状態などの諸条件を基に、主に次の三つの方法から選択している。一つは、開館以来中心的に用いている、PEG-4000 を用いた「PEG 含浸法」、もう一つは人工合成糖類トレハロースを用いた「トレハロース含浸法」、三つ目は大型の凍結乾燥機を用いた「真空凍結乾燥法」である。

これらの方法にはそれぞれ一長一短あるが、現状では PEG 含浸法を中心的に行い、他の方法については PEG 含浸法で処理が困難とされる墨書を有する資料、漆器、広葉樹芯持ち材、大型の木製品などに対しての適用を想定している。この内、トレハロース含浸法は、従来行われてきたラクチトール含浸法に代わり、新たに開発され普及しつつある処理法で、当センターにおいてはノウハウが十分に蓄積されていないこともあり、試験的な運用に止めている。今後、先進的に行っている機関からの指導を受けるなどしながら、本格的な運用を目指したい。

2）保存処理の工程

各処理法による作業は、資料の洗浄、処理前写真の撮影、処理カードの作成といった共通作業の後、次のような工程で行っている。

① PEG 含浸法

(a) 資料の梱包 … 不織布で梱包し、メッシュ入りコンテナ等に納める。

(b) PEG 含浸 … 専用の含浸装置に資料を入れ、注水、60℃に加熱する。温度が安定したら初期濃度 20% より置換開始。濃度は 1 週間に一度溶液を採取して、溶液の重量と水分蒸発後の重量比較により算出する。約９ヶ月で 100% まで濃度を上げる。

(c) 遺物の取り上げ～洗浄、乾燥（PEG の固化）… 溶液から取り出し後、温水で表面を洗浄し、自然乾燥。

(d) 処理後の点検作業 … 変形、破損の有無を点検し、処理カードに記入。

(e) 脱色及び表面処理 … 湯煎したアルコールによる表面洗浄。

(f) 修復 … エポキシ系接着剤による折損部の接合、エポキシ樹脂にマイクロバルーンを混入した材料による欠損の復元。

②トレハロース含浸法

(a) 溶液の準備 … ステンレス製の深型バットにトレハロースを水で溶解。初期濃度は 40% 程度。水温 75℃の湯をはった PEG ２m 槽中に先述のバットを設置。湯煎によって加熱。

(b) トレハロースの含浸置換 … 資料を溶液に入れ、徐々に高濃度の溶液と入れ替えることで濃度の上昇を図る。70℃で限界濃度（70% 程度）まで含浸させる。期間は小型資料で 10 日～2週間程度。

(c) 結晶化 … 資料を溶液から取り出し、送風機によって常温の風を当てることで、糖の結晶化を図る。

(d) 洗浄 … 表面に固着しているトレハロースの結晶を、スチーム洗浄機を用いて洗浄。

③真空凍結乾燥法

(a) ＰＥＧの含浸置換 … 注水したＰＥＧ含浸装置中に資料を入れ、60℃に加熱。約６ヶ月かけて50%に濃度を上げる。
(b) 遺物の取り上げ～洗浄 … 溶液から取り出し後、温水で表面洗浄。
(c) 凍結乾燥処理 … 資料を真空凍結乾燥機に入れ、装置を作動。１ヶ月程度－ 40℃～－ 60℃で予備凍結させる。その後チャンバーを真空にして、水分の昇華を図る。
平成 29 年度は、真空凍結乾燥法による木製品の処理は行っていない。

なお処理の完了した資料は、全て埋蔵文化財センターの特別収蔵庫に保管している。

３）保存処理資料の紹介

平成 29 年度に保存処理を行った資料の一部を紹介する。

①久保園遺跡第４次出土机天板（写真１・２）

久保園遺跡は博多区東平尾に所在する。４次調査区は月隈丘陵西麓の台地から沖積低地にかけて立地しており、弥生時代中期から後期にかけての集落や水利施設、古墳時代前期から古代にかけての水田跡が検出された。弥生時代の溝跡からは多量の木製品が出土している。

写真１・２は案と呼ばれる指物机の天板である。裏側に長方形状の溝を切り、これに対応する先端部をもつ脚を組み合わせる。裏側の厚みを見てみると、二つの天板のうち写真手前のものは溝と溝の間が平坦で同じ厚みであるが、奥のものは溝と溝の間を削っており、脚の組み合わせ部が最も厚みが大きく、中心は小さいという点が興味深い。案の具体的な用途については不明だが、表側に不定方向の鋭利な切り傷が多数残っていることから、工作や調理等において刃物を利用する際、作業机として利用していた可能性がある。時期は弥生時代後期と考えられる。

②今宿五郎江遺跡第 11 次出土机部材（写真３）

今宿五郎江遺跡は西区今宿町に所在する。平成 14 年度からの伊都土地区画整理事業に伴う調査の一つで、第 11 次調査区は本センター平成 26 年度年報にて報告した第 10 次調査より 150 m程西に位置する。本調査区は遺跡の西側に位置し、調査区西半の谷部を中心に多量の木製品が出土している。

写真３はそれぞれ組合せ式案の一部と考えられる。雀居遺跡４次調査から出土した同類品の全体像から、写真手前は脚部、奥は脚と天板を連結する際に継ぎ手として挟んだ部材と考えられる。先述の久保園４次のもの以上にホゾと継ぎ手の組み合わせが複雑であり、極めて規格的な製作をおこなっていることがわかる。時期は弥生時代後期～終末頃と考えられる。

③元岡・桑原遺跡群第 42 次出土指物部材（写真４）

元岡・桑原遺跡群は九州大学伊都キャンパス造成に伴う埋蔵文化財調査によって発見された。第 42 次調査区は、庚寅銘大刀が出土した元岡 G-６号墳のある第 56 次調査区から 100 m程南に位置する。詳細は年報 35 号を参照されたい。

写真４は、いずれも器種不明の指物の部材である。北部九州においては先述の案の他、これらホゾや継ぎ手を持つ部材が弥生時代後期に出現しており、日本における指物技術の浸透普及もこの時期からであると考えられる。またそれは、この時期には何らかの寸法尺度を用いた設計技術が大陸から伝来・実用化されていたことも想起させられるものであり、日本の木工史において極めて重要な資料といえる。

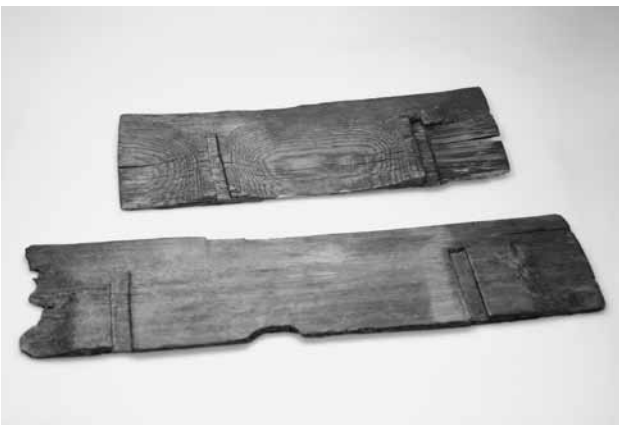


写真 1. 久保園4次・案（裏）

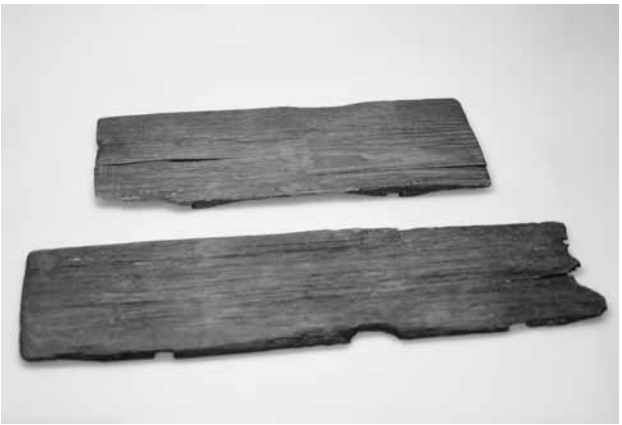


写真 2. 久保園4次・案（表）

写真 3. 今宿五郎江 11 次・案部材

写真 4. 元岡 42 次・接合部材

（3）金属製品・その他

1）保存処理の概要と工程

今年度、木製品以外で何らかの保存処理作業を行った資料は 21 遺跡、450 点で、大半は金属器を対象とした作業である。

金属器の保存処理工程は、概ね以下の工程により行っている。

①事前調査

②クリーニング

金属器の表面を覆っている埋土や余分な腐食層の除去を行う。鉄製品の場合は、腐食層が分厚く固い場合が多いことから、精密グラインダーやエアブラシといった装置を用いる。銅や青銅などの非鉄金属は、腐食層が薄く、本来の表面が良好に残っている場合が多く、アルコール洗浄や、メス、特殊なタガネを使っての作業を行っている。金銅製品など特に緻密さを要求される資料に対しては、顕微鏡下での作業となる。

③安定化

金属製品のメタル部分は、塩化物や硫化物イオンにより、著しく腐食が進行することが知られており、メタルの残存する資料に対しては、これらの物質の除去や不活性化が必要となる。鉄製品は、内部にメタルが残存しすべてが錆に置き換わっていない資料に対して、セスキ炭酸ナトリウムの水溶液に浸漬して塩化物イオンの溶出を、また、銅製品については、ベンゾ･トリ･アゾール（BTA）のアルコール溶液に浸漬して塩類の不活性化を図っている。

④樹脂含浸

資料の強化や腐食の要因物質である酸素や水気との遮断を目的として、合成樹脂を含浸し、保護膜の形成を行う。鉄製品、銅製品とも無色で変色の少ないアクリル樹脂を用いるが、塗膜の厚さを考慮して、鉄製品にはパラロイド NAD-10、銅製品には同 B-72 をそれぞれ使用している。内部まで含浸させる必要がある資料については、50cm/Hg 程度の減圧含浸を行っている。

⑤修復

接着は強度を必要としない場合はセルロース系、ある程度の強度を要するときはエポキシ系の

接着剤を使用。欠損の補填を行う場合、接着剤にマイクロバルーンを混ぜて粘度を高めたものや、金属粉と充填剤の入ったエポキシ樹脂（日新レジン／ポップメタル）などを使用している。

以上の処置を行った後も、決して安心はできない。温度や湿度などの周辺環境は、資料の保全に何らかの影響を及ぼすものであり、処置後の資料もできる限り安定した環境で保管されることが望ましい。当センターでは、金属器は基本、温湿度管理をしている特別収蔵庫に保管しているほか、必要に応じて、酸素を透過しない特殊なガスバリア袋に資料と脱酸素、脱水の機能を持った薬剤を封入する方法（三菱ガス化学／ RP システム）も用いている。

2）保存処理資料の紹介

平成 29 年度の保存処理を実施した資料の中で、特徴的な資料が見つかった。その中から 3 点を資料紹介する。

仲島 5 次調査において、流路とされる遺構から完形の鏡が発見された（写真 5）。

出土状況から、水辺の祭祀で使用されたものと考えられている。時期は、ともに出土した土器から弥生時代後期中頃と推定される。

出土後すぐに取り上げそのまま埋文センターに持ち込み、透過 X 線撮影によって観察できた文様や文字の確認を、当日中に調査担当者とともに行った。その結果、中国の後漢時代のもので内行花文鏡と呼ばれる形式であることが明らかとなった。直径 11.3㎝で、鏡背面には蝙蝠座と「長宜子孫」という子孫繁栄を願う吉祥句がみられる。

その後、保存処理に係る事前調査において、目視による付着物等の観察後、透過 X 線撮影を実施し劣化調査を行った。上記の調査で得られた情報をもとにクリーニングを実施し、クリーニング後に蛍光 X 線分析法による材質調査を実施した。以下に、保存処理で得られた知見を述べる。

鏡は、鏡面にうっすらモノが映るほど、遺存状態は良好である。泥炭層の環境で埋蔵されていたことから酸素が少なかったことも影響し、腐食が

写真 5. 仲島 5 次出土鏡（背面）の外観写真

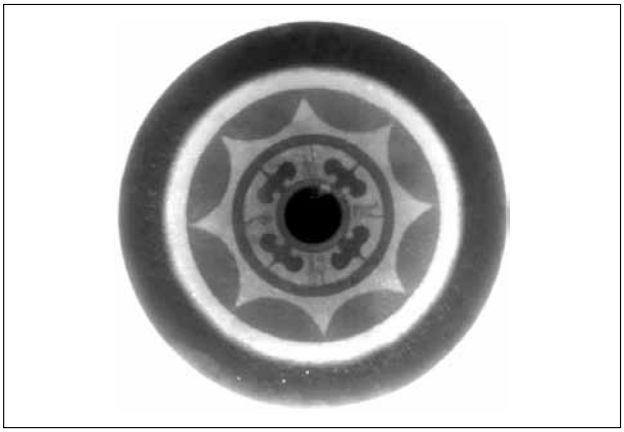


写真 6. 仲島 5 次出土鏡の透過 X 線像

緩慢であったためかとみられる。表面観察の結果、鏡の使用状況に係る有機質痕跡や顔料は見当たらなかった。

透過 X 撮影で観察をしたところ内部に鬆と、縁部分に細かいヒビが認められる（写真 6）。内部構造は、見た目ほど遺存状態が良好ではないようだ。この点に関して、鋳造に生成された可能性と埋蔵環境由来の可能性が想定される。

次に、蛍光 X 線分析による材質調査を実施した。蛍光 X 線分析法は、強い X 線を試料に照射した時、照射された部分に存在する元素が固有の X 線を反射するという性質を利用する。出てきた元素固有の X 線を検出器で捉えることで、対象物を構成している元素の種類と量を推定することができる。

蛍光 X 線分析の結果、銅(Cu)>スズ(Sn) 鉄(Fe) >鉛（Pb） >ヒ素（As） >銀（Ag） という組成を示した（図 1）。仲島 5 次調査出土鏡は、銅（Cu）にスズ（Sn） と鉛（Pb） を混ぜた三元系の青銅製であると推定される。その他、鉄（Fe） は材料

として用いられた可能性とともに埋蔵環境由来の可能性が大きいため今回は詳細な検討を行わない。ヒ素（As）と銀（Ag）は微量に検出されたが、出土鏡では主要元素の銅（Cu）や鉛（Pb）に係る鉱山由来の微量元素として存在するため、今回も微量元素として判断する。

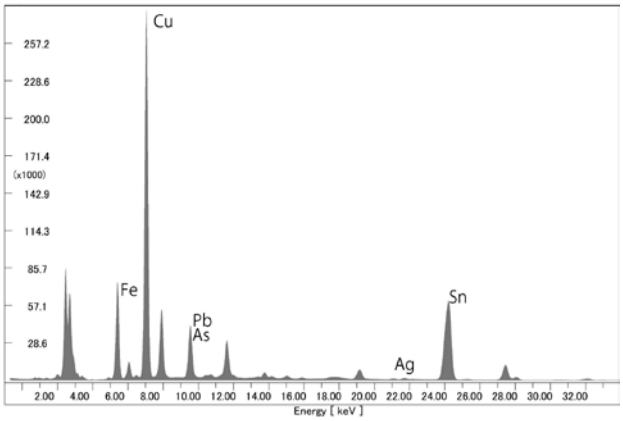


図 1. 仲島 5 次出土鏡の蛍光 X 線分析結果

これらの結果は、過去に行われている同時代の青銅鏡の分析結果と類似するものである。この時期の福岡平野では、完形の中国鏡は少なく、貴重な例である。

千里大久保 1 次調査では、5 世紀前葉頃に築造されたと推定される円墳主体部の組合式箱式石棺棺外から鉄製直刀が見つかった（写真 7）。

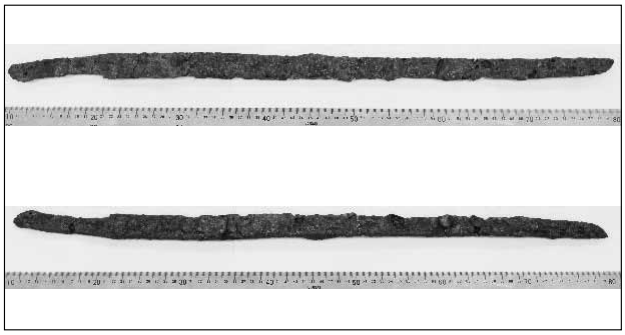


写真 7. 千里大久保 1 次出土直刀の外観写真

全長 69.2㎝、刀身の幅は約 3㎝をはかる。棟は平造で、茎へ棟側が緩やかに移行するのに対し、刃部と茎には段差を有する関が認められる。透過 X 線撮影の結果、茎尻付近に目釘孔が2個あることが明らかとなった（写真 8）。また、鞘や柄などの直刀に関連する有機質痕跡は認められなかった。

写真 8. 透過 X 線画像（関から目釘孔部分）

箱崎 77 次調査では、火打ち金が出土した（写真 9）。火打ち金とは、火打石に叩きつけて火花を起こすための発火道具である。箱崎 77 次調査出土火打ち金は、いわゆる山型という型式で、ともに出土した土師器などから、時期は 12 世紀から 13 世紀頃のものとみられる。

写真 9. 箱崎 77 次出土火打ち金の外観写真

写真 10. 箱崎 77 次出土火打ち金の透過 X 線像

これまでに、福岡市内では箱崎 26 次調査や吉塚祝町 2 次調査などで火打ち金が出土しているが、今回発見されたような両端を鉤状に曲げた形態のものは前例がない。

他地域に類例を求めると、長崎県鷹島神崎遺跡出土火打ち金があげられる。X 線 CT 調査によ

る画像を観察すると、火打ち金の両端を鉤状に曲げた形態が認められる。

また、藤木聡氏は韓半島で認められる火打ち金について、出土資料および民具、文献など幅広い視点から考察を行っている（藤木 2018）。箱崎 77 次出土火打ち金は、氏が資料紹介した中で示した増浦洞遺跡 7 号墳から出土したものとも類似している。

中世の箱崎遺跡は、博多と並ぶ対外交流の拠点として歴史を重ねてきた。この火打ち金は、箱崎遺跡の歴史を考える上で、また、近隣諸国との繋がりを示す資料として、注目される資料である。

以上、3 点の資料紹介を行った。今後、博物館展示や教育、研究などに際して、保存処理された資料とともに、構造や材質に関する情報も含めた幅広い活用が望まれる。

【参考文献】

大塚紀宜・松崎友理 2018『箱崎 55　―箱崎遺跡第 43 次・77 次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1345 集　福岡市教育委員会

下村智編 1995『雀居遺跡２－福岡空港整備に伴う埋蔵文化財調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 406 集　福岡市教育委員会

杉山富雄編 2014『今宿五郎江 16 －今宿五郎江遺跡第 11 次調査報告（2）－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1221 集　福岡市教育委員会

鈴木美奈都 2015『松浦市内遺跡確認調査 (4)』松浦市文化財調査報告書第 6 集　長崎県松浦市教育委員会

常松幹雄編 2014「第 42 次調査の記録－２－」『元岡・桑原遺跡群 23 －九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1246 集　福岡市教育委員会

藤木聡 2018「韓半島における火打ち金・火打石―東アジアにおける人と火の関係史解明に向けて―」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要第 14 号』宮崎県立西都原考古博物館

星野恵美 2006『吉塚祝町 2　吉塚祝町遺跡第 2 次調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 912 集　福岡市教育委員会

本田浩二郎（編）2018『福岡市埋蔵文化財年報 vol.31 平成 28 (2016) 年度版』福岡市教育委員会

松浦一之介 2004『箱崎 21　箱崎遺跡第 26 次調査報告書 (1)　箱崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 815 集　福岡市教育委員会

吉田大輔 2018『千里大久保遺跡 1―千里大久保遺跡第 1 次調査報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1334 集　福岡市教育委員会

力武卓治編 2003『雀居９－福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 748 集　福岡市教育委員会

5．入館者数

（1）入館者総数

区分			4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計(人)	比率(%)
日数			26	26	26	26	27	26	26	26	23	23	24	27	306	
個人	一般	男	121	175	256	148	133	132	135	122	131	100	127	164	1,744	63.7%
		女	63	54	77	32	59	39	39	45	26	29	62	52	577	21.1%
		小計	184	229	333	180	192	171	174	167	157	129	189	216	2,321	84.8%
	学生	小学生	5	8	9	4	36	14	3	10	10	3	5	10	117	4.3%
		中学生	6	5	0	4	13	3	2	0	0	0	0	3	36	1.3%
		高校生	0	1	0	1	3	0	0	2	0	0	9	2	18	0.7%
		大学生	2	11	12	9	111	11	9	10	8	5	8	10	206	7.5%
		その他	3	3	5	3	5	5	6	1	1	3	1	3	39	1.4%
		小計	16	28	26	21	168	33	20	23	19	11	23	28	416	15.2%
	合計 (a)		200	257	359	201	360	204	194	190	176	140	212	244	2,737	100.0%
団体	一般		103	27	245	216	149	284	169	179	206	283	239	196	2,296	83.1%
	(団体数)		4	2	4	2	6	5	3	2	5	7	9	4	53	
	小学生		0	45	18	130	72	0	0	27	0	0	0	10	302	10.9%
	(団体数)		0	1	2	1	2			3				1	10	
	中学生		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%
	(団体数)		0												0	
	高校生		0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	8	0.3%
	(団体数)		0				1								1	
	大学生		0	0	88	4	0	0	0	0	0	0	0	65	157	5.7%
	(団体数)		0		2	1								7	10	
	合計 (b)		103	72	351	350	229	284	169	206	206	283	239	271	2,763	100.0%
	(団体数計)		4	3	8	4	9	5	3	5	5	7	9	12	74	
総計 (a+b)			303	329	710	551	589	488	363	396	382	423	451	515	5,500	
出前授業			270	542	536	194	37	314	128	176	129	0	0	0	2,326	
(学校数)			5	8	8	3	1	3	2	2	1	0	0	0	33	

（2）個人入館者年齢区分

区分	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計(人)	比率(%)
0～19才	17	19	15	12	58	23	11	14	11	6	16	18	220	8.0%
20～29才	16	20	20	18	117	14	12	14	18	12	14	17	292	10.7%
30～39才	28	41	40	40	45	36	35	33	38	27	36	43	442	16.2%
40～49才	33	48	63	43	52	53	60	52	37	28	62	67	598	21.9%
50～59才	43	58	63	42	40	32	32	42	40	39	46	43	520	19.0%
60～69才	52	55	105	35	37	35	25	27	25	22	29	36	483	17.7%
70～79才	9	15	43	11	11	7	18	7	7	5	9	18	160	5.8%
80才以上	1	1	10	0	0	4	1	1	0	1	0	2	21	0.8%
計	199	257	359	201	360	204	194	190	176	140	212	244	2,736	100.0%

（3）個人入館者住所区分

区分	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計(人)	比率(%)
福岡市	121	149	215	114	246	135	130	110	123	103	127	146	1,719	62.8%
福岡県内	42	48	90	28	71	23	36	23	19	27	30	43	480	17.5%
県外	34	56	48	59	43	44	28	48	32	10	50	55	507	18.5%
国外	3	4	6	0	0	3	0	9	2	0	5	0	32	1.2%
計	200	257	359	201	360	205	194	190	176	140	212	244	2,738	100.0%

（4）平成 26～28 年度一覧表

区分	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	半期 計	合計
平成26年度	226	652	631	501	470	460	437	453	370	325	315	366	2,940	5,206
平成27年度	349	582	551	395	572	458	512	447	389	318	386	355	2,907	5,314
平成28年度	303	329	710	551	589	488	363	396	382	423	451	515	2,970	5,500
区分	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
日数	26	26	26	26	27	26	26	26	23	23	24	27		
各月一日平均（人）	11.7	12.7	27.3	21.2	21.8	18.8	14.0	15.2	16.6	18.4	18.8	19.1		
平成 28 年度累計（人）	303	632	1,342	1,893	2,482	2,970	3,333	3,729	4,111	4,534	4,985	5,500		
開館以降累計（人）	379,663	379,992	380,702	381,253	381,842	382,330	382,693	383,089	383,471	383,894	384,345	384,860		

6．平成29(2017)年度当初予算

（1）歳入

77,251 千円　(国庫補助金 15,005 千円、使用料及び手数料 807 千円、諸収入 1,439 千円、市債 60,000 千円)

（2）歳出

290,259 千円　（自主財源 213,008 千円）　内訳：管理運営費 86,267 千円、事業費 203,992 千円

II　研究報告

1．福岡市内出土石製玉類の用材について

比佐　陽一郎

（1）はじめに

装身具としての玉の利用は旧石器時代に遡る。時代が下ると様々な色の玉が見られるが、縄文や弥生といった時代には緑や青といった寒色系の色調が多い。そこには、玉が魂と同義で、古代の人々が魂の色を青色と認識していたことに関係があるものと考えられる（辰巳 2008）。

金属やガラスが流通する以前には、その材質の中心は石であり、緑色の石材が選択的に用いられている。縄文時代以降、特に著名な石材の一つとして挙げられるのが硬玉である。日本にいくつかの産地が知られるが、近年、自然科学的分析によって遺跡から出土する資料の産地推定が試みられ、糸魚川産のものが多く流通していたことが明らかとなっている（藁科 1988）。この事実は古代におけるものの流通を考える上で大きな成果であり、更なる研究の発展へと繋がっていった。

しかし、緑や青の色調を呈する石材は硬玉だけではない。緑や青、あるいはそこに白が混じるという観点で選ばれた結果として、いくつかの種類の石材が用いられていたようである。ところが、中には肉眼による判別では誤認する石材もあり、色調だけで「ヒスイ」と同定されるものも少なくない。誤った同定結果が発掘調査報告書などに記されると、考古資料の流通論などに大きな影響を及ぼしかねない。そのことを如実に示す近年の大きな研究成果が、熊本大学の大坪志子氏による縄文時代の玉類の研究（大坪 2015）といえよう。氏は、かつて肉眼観察によって翡翠とされてきた緑色の玉が、自然化学分析によって翡翠と異なるものであるという報告をきっかけとして、同様の石材が九州一円に広がることに気づき、鉱物の専門家などとの共同研究によって、この石材がクロム白雲母という種類であることを突き止めた。この石材を用いた玉が、縄文時代後期に九州一円を席捲し、東日本にまで及ぶことを明らかとし、「九州ブランド」という言葉でこれを表し、ものの流れが東から西だけではなく、その逆も存在したことを提示したのである。

大坪氏による玉類の研究において、石材の蛍光 X 線分析による材質調査は福岡市埋蔵文化財センターの装置が用いられた。その作業に関連して福岡市の玉類についても分析を行い、その結果は発掘調査報告書や文化財関係の学会で発表を行っている（比佐 2007・2011・比佐ほか 2008）。その後も引き続き折を見て調査を行ってきたが、古墳時代以前の玉の石材について、新たな知見を得ることができた。既報の内容も一部含むが、この場を借りて報告を行いたい。

（2）調査方法と主な石材の特徴

石材の同定は、鉱物や岩石の研究分野では、試料を採取し、プレパラートに加工した上での偏光顕微鏡観察などによって行われる。また、物質の材質分析で正確な結果を得るためには、対象となる資料をすり潰して均質な状態にした上で、蛍光 X 線や X 線回折といった分析が行われる。しかし、考古学の発掘調査で出土した資料は埋蔵文化財であり、資料の性状を調べるために資料そのものの状態を大きく変化させる、更には資料の姿を失わせるようなことは本末転倒な行為である。そのため、考古資料の分析調査は非破壊分析が原則となる。

当センターでこれまで行ってきた調査方法は、肉眼観察と比重測定、蛍光 X 線による非破壊の定性分析を組み合わせた方法である。蛍光 X 線分析では、装置に組み込まれたプログラムを利用することで、得られた元素の組成比を数値化する事が可能である（定量分析）。しかし、正確な値を得るためには様々な前提条件が必要であり、そ

れらは考古資料にはそぐわない。そこで、結果は得られた元素の種類と画面上で見るピークの高低により判断する（定性分析）。このため、石材の同定というよりは推定に近いかもしれないが、少なくとも肉眼観察のみによる結果よりは確度が高いものと考える。

上記の方法により同定可能な石材と、それぞれの特徴を記す。

◆硬玉

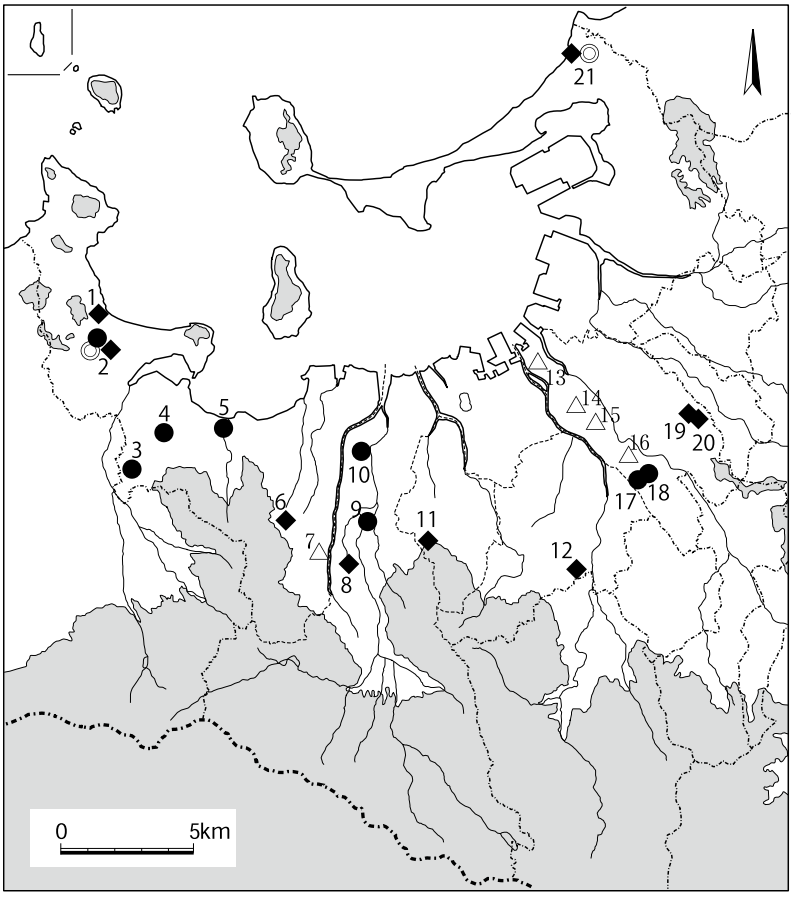
透明感を持った鮮やかな緑色から白、灰色の混じるもの、逆に緑がほとんど入らないものまで様々である。比重は 3.3 前後の値を示す。検出元素の特徴としては、小さなピークながらナトリウム（Na）が含まれること、カルシウム（Ca）が強いことなどが挙げられる。またニッケル（Ni）やストロンチウム（Sr）も強弱はまちまちであるが、共通する検出元素といえる。

◆クロム白雲母

緑色を基調とし、白や灰色の混入物が見られる場合もある。硬玉との違いは質感や透明感で、クロム白雲母の方が蝋の様なやや軟質な感じがある。しかし個体差もあり、細かい部分を文字で表現することは難しい。見慣れればある程度の判別は可能であるが、最後は比重測定や蛍光 X 線分析により判別することになる。蛍光 X 線分析では、硬玉がナトリウム、カルシウムを含むのに対し、クロム白雲母はナトリウムが見られず、カリウム（K）、クロム（Cr）が特徴的な元素として多く検出される。比重は硬玉の 3.3 に対して、2.8 程度と低い値を示す。

◆アマゾナイト

青～緑を基調として、乳白色の部分が混在することもある。緑というよりも青に近い色味によって、クロム白雲母や硬玉と見分けることができる。比重は 2.5 程度とやや低め。蛍光 X 線分析では、アルミニウム（Al）、カリウム、ルビジウム（Rb）



《凡例》
◆ クロム白雲母　● アマゾナイト
◎ 参考資料　△ その他の主要遺跡

1. 大原 D
2. 元岡・桑原、石ヶ元古墳群
3. 千里　4. 徳永 A
5. 今宿　6. 野方中原
7. 吉武高木　8. 四箇東
9. 免　10. 有田・小田部
11. 鳥越古墳群　12. 老司古墳
13. 博多　14. 比恵　15. 那珂
16. 板付　17. 諸岡 B　18. 高畑
19. 席田大谷　20. 久保園
21. 三苫・三苫古墳群

図 1　本稿で取り扱う遺跡の位置図

といった元素の検出を特徴として挙げることができる。

（3）新たに得られた知見

次に調査によって得られた知見を記す。一覧表は既往の調査も含め上記の方法によって確認された、特徴的な石材が用いられた玉類である。その中から、古墳時代の特殊な玉と、新たに確認されたアマゾナイトの事例を紹介する。

1）古墳時代の特殊な玉の事例

老司古墳は竪穴系石室から横穴系石室への過渡期的様相を示す主体部を有する古墳として全国的に著名な前方後円墳で、国の史跡にも指定されている。5世紀初頭築造の古墳と考えられている。埋葬主体として4基の石室と一基の石蓋土壙墓が設けられる中、規模や副葬品から3号石室が初葬で中心的主体部と考えられる。ここからは複数枚の青銅鏡や甲冑一式をはじめとする武具、刀剣、鏃といった武器類、多種多様な工具など首長墳にふさわしい質、量の副葬品が見られる。玉類も豊富で、出土状況からA～E、五つの群に分けられている。特に各群に含まれる勾玉は大型の硬玉製で、福岡市内では類を見ない大きさと数を誇る。その中の玉D群は硬玉製の勾玉1点、ガラス製管玉1点、50点を超える碧玉製の管玉で構成されているが、一点、濃く鮮やかで、やや透明感のある緑色を呈し、両側の径が異なり一部分が突出するなど、不整形な形状の管玉が含まれる。他の碧玉製管玉とは大きく異なる外観である。長さ8.0mm、径7.7mm(いずれも最大値)、重さは0.59gである。これが蛍光X線分析の結果、クロム白雲母であった。

鳥越古墳群は、福岡市域南側に広がる油山山麓丘陵上に営まれた後期群集墳の一つである。発掘調査当時は古墳の分布確認が不十分で、群の設定が明確にできなかったことから、複数の古墳群を一括して片江古墳群として調査が行われた。その後の整理でこれらは早苗田古墳群、鳥越古墳群に分けられている。

鳥越古墳群B群1号墳(調査当時は片江6号墳)は平面が正方形に近い単室の玄室を有する横穴式石室を主体部とし、そこから須恵器・土師器、鉄鏃、刀子、耳環、玉類が出土している。須恵器からは6世紀後半に築造され、7世紀前半まで使われた古墳と考えられる。

玉類は水晶製の切子玉1点と、ガラス丸玉3点、滑石製臼玉1点、碧玉製管玉1点、硬玉製とされる管玉1点、琥珀製と見られる玉の残欠が報告されている。この「硬玉製」とされている管玉は、長さ20.5mm、径11.9mm（いずれも最大値）、重さ4.7gで両面穿孔されている。やや透明感のある深い緑色で、側面は面取りされており、小口面は両側とも窪んでいる。共伴する碧玉製管玉が整った円筒形で弥生～古墳時代に通有のものであるのとは、明らかに材質、形状が異なっている。材質分析の結果、クロム白雲母であった。

席田大谷古墳群は福岡空港東側に広がる丘陵上に造られた後期群集墳である。平成6年度に実施された席田大谷遺跡5次調査では、席田大谷2号墳とされる後期群集墳の一基が調査された。横穴式石室は破壊を受けていたものの、床面の遺物の一部は原位置を保っており、耳環と玉類が人体に装着された姿を想定される状況で出土している。玉類は石製の勾玉、管玉、切子玉、丸玉、ガラス製の小玉など、総数百点を超える。その中で小型の勾玉（最大長13.2mm、重さ0.46g）は、深い緑色を呈しており、分析の結果クロム白雲母であった。古墳の時期は6世紀の中頃と見られる。

以上の事例の内、特に老司古墳と鳥越古墳群の管玉は、弥生時代以降に通有の、碧玉製で整った円筒形のものとは明らかに異なった外形となっている。席田大谷古墳群の勾玉は、石材こそクロム白雲母ではあるが、勾玉の形状としては古墳時代の資料として違和感は無い。

クロム白雲母ではないが、東区の三苫古墳群B群では、古墳時代とするには違和感のある硬玉製の玉が出土している。8号墳出土の硬玉製の玉は丸みを帯びた三角形の形状を呈するもので、最大長が23.1mm、重さは10.27gと、比

較的大型である。垂飾あるいは涙滴形とも表現すべき形状は、古墳時代に類例を見いだし得ない。７世紀前半の９号墳から出土した硬玉製の小玉１点も、その石材種とともに半球形のややいびつな形状からは、縄文時代の小玉との類似性が想起される資料である。

西区の石ヶ元古墳群 28 号墳では、黒色の管玉が出土している。古墳は7世紀代のもので、横穴式石室を主体部とし、武器、工具といった鉄製品と、180 点を超える玉類、耳環 18 点という豊富な装身具が出土している。黒色管玉の形状は中央が膨らみ両端が細くなり、端は整わず歪みがある。長さ 18.6mm、太さは最も太い部分で 5.7mm である。透過 X 線観察では不明瞭ながら両面穿孔と見られる。発掘調査報告書作成時に観察、分析を行ったが、材質が不明であった。ただ、蛍光 X 線分析で銅が検出され、玉に用いられる石材には通常含まれない元素であることから、消去法的にガラスと考えた（比佐ほか 2003）。最近改めて X 線回折分析を行ったところ、SiO_2 のピークが認められ、この資料が石英を主体とする石であることが確認された。改めて観察すると、その形状、石材は古墳時代の管玉には珍しく、縄文時代の資料に類例が多いように見受けられ、これまで記してきた幾つかの事例に共通する要素があると考えた。

福岡市外でも、近隣の久山町上ヶ原古墳群で、ガラス小玉とともにアマゾナイト製の小玉が存在する事例を報告したことがある（比佐 2009）。アマゾナイトは後述のように弥生時代の半島との関係が想起される資料である。

他にも集落遺跡では、東区三苫遺跡２・３次調査で古墳時代後期（６世紀後半）の遺構からクロム白雲母製小玉が出土している。この調査を含む三苫遺跡では古墳時代後期の、滑石を用いた玉作り工房が複数見つかっているが、クロム白雲母製の小玉は大型の土坑 SK0003 から土師器、須恵器、鉄製品、滑石製小玉とともに出土している。滑石は原石や未製品が周辺を含めて多数出土するが、クロム白雲母と見られる製作関連資料は今のところ見つかっておらず、この小玉がここで作られたと判断する資料は無い。一方で、玉の形状や大きさは、大原 D や四箇東の資料と比較してよく類似しており、縄文時代の資料としても何ら違和感は無い。

この様に、古墳の副葬品や集落の出土品に、古墳時代とは異なる様相の玉類が含まれる事例のあることが認められた。福岡市外でも、上毛町の百留横穴墓群で縄文時代のものと考えられるヒスイ製の玉が 20 点出土する事例が「極端な伝世玉類」として報告、紹介されている（大賀 2010）。その理由、要因を多少考えてみたい。

そもそも、用材や形状が古墳時代に通有のものと異なる玉が出土した場合に、これがそれ以前の時代のものと考えるのであれば、古墳時代当時に作られたものでは無いことを検証、証明する必要がある。しかし、玉から直接的に製作された絶対年代を知ることは不可能であり、状況から推測するしかない。古墳時代の玉作り遺跡としては、滑石や水晶、碧玉を用いた事例が知られているが、その中にクロム白雲母は含まれていない。それだけでは根拠として薄弱ではあるが、形態上の特徴なども加えると、特に老司古墳や鳥越 B- 1号墳、三苫 B- 8号墳、石ヶ元 28 号墳の事例などは、古墳時代に製作されたものとするには違和感があり、縄文時代の玉が用いられたと考えるのが妥当ではないかと考える。

その前提で次に問題になるのは、時代の異なる玉がどの様に入手されたかである。クロム白雲母を例にとると、その盛行期が縄文時代後期であり、そこから古墳時代後期まで 2000 年ほどの時間経過が想定される。玉類は貴重品で、石製であれば特に経時的に変化、変質するものではないが、それにしても玉だけがこれほどの長時間伝世するとは考えにくく、古墳時代ないしはそれに近い時代の人が縄文時代の遺跡から採取し、他の玉類に加え（連ね）たと考える方が蓋然性が高いように思われる。更に、この様な古墳時代当時の「好古」的な行為が、単なる偶発的なものか、意図的に宝探しの様な事が行われ何らか付加価

値を持って流通していたのかといった事については、今後の事例の増加を待って検討すべきであろう。

2）アマゾナイトの事例

次に近年行った分析により事例が増加しているアマゾナイト製の玉について記す。アマゾナイト（天河石）は微斜長石（$KAlSi_3O_8$）の一種で青や緑に発色するものとされる。韓国の青銅器時代に多く見られ、韓国内に産地があるともされる（庄田 2006）、日本でも縄文時代晩期から、北部九州を中心に事例が散見される。微斜長石自体はそれほど珍しい石材ではないものの、大坪氏は、日本で採取、使用された痕跡がないことなどから「日本列島でアマゾナイトが出土した場合は搬入品と判断される」としている（大坪 2015）。

早良区に所在する大規模複合遺跡である有田・小田部遺跡群では、それぞれ異なる調査区で四例が確認されている。一例は勾玉、他三例はいずれも小玉である。

勾玉は 36 次調査の２号甕棺からの出土である。甕棺は立岩式段階で、弥生時代中期後半のものである。勾玉は甕棺墓の墓坑からの検出であるが、報告者は副葬品としての認識を示している。勾玉の形状は通有のコンマ形ではなく半月形を呈する。長さ 14.4mm、幅 6.45mm、重量は 0.48g である。鮮やかな青色で、部分的に乳白色の部分が見られる。報告書では「硬玉」と記載されている。

小玉は 35 次、106 次、152 次の各調査からの出土で、住居址やその周辺から検出されている。35 次調査の７号住居跡は古墳時代初頭の遺構と見られる。小玉は、報告書には記載がないが、遺物台帳によると、この７号住居跡周辺からの出土とされる。径 4.8mm、厚さ 2.45mm、重さ 0.08g の小さな玉で、鮮やかな青緑色である。

106 次調査の資料は住居址（SC12）北側覆土の出土である。報告書では「ガラス小玉」で「風化し青白色を呈す」と記載されている。住居址内の出土須恵器は六世紀中頃のものである。同じ住居址から滑石製の臼玉２点も出土している。径 4.8mm、厚さ 2.7mm、重さ 0.1g の小さな玉で、乳白色の部分が多い。

152 次調査の資料は報告書には掲載されていない。12 号住居址（SC12）から出土した。２軒の住居が切り合い、当該住居址は６世紀前半の須恵器が出土する住居に切られている。径 3.55mm、厚さ 1.9mm、重さ 0.04g の非常に小さな玉で、鮮やかな青緑色である。

弥生時代の王墓や生産遺跡で著名な春日市の須玖遺跡群と、大規模拠点集落である福岡市の比恵・那珂遺跡の間に位置する諸岡遺跡や高畑遺跡でも、近年の分析によってアマゾナイト製の玉の存在が確認された。諸岡遺跡の半月形勾玉は、朝鮮半島系の無文土器や弥生時代前期末の土器とともに出土している。高畑遺跡の小玉は古墳時代中期の溝からの出土であるが、周辺からは弥生時代の資料も出土している。

有田・小田部遺跡は旧石器時代以降、連綿と集落が営まれており、様々な時代の資料が混在する。アマゾナイト製の玉類は甕棺墓出土の資料を除くといずれも古墳時代の住居址やその周辺からの出土である。クロム白雲母と同様に、古墳時代人が数百年前の資料を見つけ出した可能性も否定できない。しかし、数 mm の微細な資料が単独で出土し、遺構への帰属の度合いは明確ではない状況では、積極的に肯定することも難しい。当該遺跡では初期稲作の時期の資料も豊富であり、その後の弥生時代においても青銅器を副葬する甕棺墓が営まれるなど、この時代の遺構、遺物の密度は比較的濃いと言える。古墳の副葬品にクロム白雲母はあってもアマゾナイトが含まれていたという事例は、少なくとも福岡市内には存在しない。アマゾナイト製玉類の集中も、弥生時代の事柄として評価する方が妥当で、渡来系文物との関わりについても注目する必要があるのかもしれない。

なお、元岡・桑原遺跡群第 42 次調査で出土した小玉も、報告書では「ヒスイ製」と記述されているが（米倉 2015）、調査の結果、アマゾナイ

トであった。ここでは一覧表への記載と写真による紹介にとどめ、詳細は別途報告したい。

石製玉類の材質調査をきっかけとしてアマゾナイトという石材の認識も広まったことで、福岡市内では 11 例が確認されている。管見に触れる範囲では、これまで全国でも九州や四国で一桁内の出土事例であった。福岡市内の 11 例という数が果たして交流窓口として妥当なものなのか、他地域でも庄田氏が言うように「より多くの資料が翡翠と報告されたものの中に埋もれている可能性がある」（庄田 2006）のか、今後の動向を注目したい。

（4）おわりに

考古学の基本の一つは、ものを見ることである。考古資料の観察においては、正しい観察の方法、視点を手に入れることで、以後、ものを見る際に認知度が大きく高まることは誰しも経験することであろう（いわゆる「目が肥える」）。一見すると同じように見える緑色の玉の石材も、特徴を捉えることである程度の識別は可能と考える。更に分析装置が無い場合でも、小数点以下二桁以上計測できる電子天秤があれば、比重測定により更なる絞り込みや推定もできる。同定が困難な場合も、安易に石材名を記すのではなく、色調や質感といった特徴を的確に表現し、カラー写真などと合わせて提示することで、石材を研究テーマとする人の網やアンテナに引っかかる工夫や配慮も必要と考える。

発掘調査によって考古資料が増加し続ける中、日本国内のみならず、海外を含めた資料の流通論などがますます盛んになることは容易に想定される。玉の石材についても、正しい認識の広まりによって研究がより適切に広がることを期待したい。

【参考文献】

大賀克彦 2010「百留横穴墓群出土の玉類に関する諸問題」『百留横穴墓群 - 自然崩壊に伴う発掘調査及び範囲確認調査報告書 -』上毛町文化財調査報告書第 13 集　上毛町教育委員会

大坪志子 2015『縄文玉文化の研究ー九州ブランドから縄文文化の多様性を探るー』雄山閣

庄田慎矢 2006「朝鮮半島の玉文化」『季刊考古学』第 94 号　弥生・古墳時代の玉文化　雄山閣　p.85

辰巳和弘 2008「死者・異界・魂」『古事記を読む』吉川弘文館　p.112

寺村光晴 1980『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館　p.43

比佐陽一郎・片多雅樹・村上隆 2003「装身具類の調査ーガラスと耳環を中心としてー」『九州大学統合移転用地内発掘調査報告書　元岡・桑原遺跡群２ー桑原石ヶ元古墳群調査の報告ー』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 744 集　福岡市教育委員会

比佐陽一郎 2007「元岡・桑原遺跡群第 27 次調査出土石製小玉の石材について」『九州大学統合移転用地内発掘調査報告書　元岡・桑原遺跡群９ー第 26 次調査報告ー』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 963 集　福岡市教育委員会

比佐陽一郎・大坪志子・小畑弘己 2008「縄文～古墳時代の装身具に用いられる石材の蛍光 X 線分析について」『日本文化財科学会第 25 回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

比佐陽一郎 2009「福岡県久山町上ヶ原古墳群で出土した装身具類の調査」『上ヶ原古墳群ー福岡県糟屋郡久山町所在遺跡の発掘調査報告書ー』久山町文化財調査報告書第 13 集　久山町教育委員会

比佐陽一郎 2011「石製玉類の分析ー九州地方の事例を中心としてー」『古代の玉ー最新の保存科学的研究の動向ー』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

藁科哲男 1988「ヒスイの原産地を探る」『古代翡翠文化の謎』新人物往来社

表－1　福岡市内出土のクロム白雲母・アマゾナイト玉類

本稿での資料番号	出土遺跡	福岡市資料登録番号	出土遺構	資料名	遺構（層位）の時期	報告書No.	報告書掲載図番号	備考
クロム白雲母								
C-1	大原 D3 次	926505453	旧河川（8-3 区）	管玉	縄文後期末～晩期前半	481	111-19	報告書記載は「緑色軟玉製」、市報 963 集に分析報告
C-2	大原 D3 次	926505454	旧河川（8-3 区）	小玉	縄文後期末～晩期前半	481	111-17	報告書記載は「緑色軟玉製」、市報 963 集に分析報告
C-3	大原 D3 次	926505455	旧河川（8-3 区）	勾玉	縄文後期末～晩期前半	481	111-18	報告書記載は「緑色軟玉製」、市報 963 集に分析報告
C-4	大原 D3 次	926500642	溝（6 区 SD-01）	小玉	縄文後期末～晩期中頃	481	73-128	報告書記載は「翡翠」、新たに行った分析で判明
C-5	大原 D3 次	926505252	包含層（8-4 区 A2 層）	小玉	縄文後期末～晩期前半	481	106-252	報告書記載は「長崎ヒスイ」、新たに行った分析で判明
C-6	元岡 27 次	015310052	住居址（SC-24）	小玉	古墳後期	909	30-24	市報 963 集に分析報告
C-7	元岡 27 次	015310053	柱穴（Pit-1016）	小玉	古墳後期	909	30-23	市報 963 集に分析報告
C-8	野方中原 1 次	730420009	石棺墓（第 3 号石棺）	勾玉	弥生終末～古墳初頭	30	36-9	新たに行った分析で判明
C-9	四箇東 1 次	751910349	詳細不明	小玉	縄文時代？	未報告		市報 963 集に分析報告
C-10	鳥越古墳群 B-1 号墳	720204054	古墳石室床面	管玉	古墳後期	24	30-6	報告書記載は「硬石製」、新たに行った分析で判明
C-11	老司古墳	865813068	古墳石室（3 号石室〔玉群 D〕）	管玉	古墳中期	209	103-62	報告書で「特殊管玉」として別記、市報 963 集に分析報告
C-12	席田大谷 2 号墳	942100020	古墳石室	勾玉	古墳後期	537	8-15	報告書記載は「碧玉製」、新たに行った分析で判明
C-13	久保園 3 次	035020025	溝（SD-009・b）	勾玉（無孔）	弥生後期末	837	59-344	未製品か、大坪論文所収、別途分析で確認
C-14	久保園 4 次	082733047	包含層（Ⅲ区 1 面）	勾玉	弥生後期	1148	218-106	報告書に分析報告所収
C-15	三苫 2・3 次	944900590	土坑（SK0003）	小玉	古墳後期	477	97-590	報告書記載は「ヒスイ」、新たに行った分析で判明
アマゾナイト								
A-1	千里 1 次	091310077	柱穴（5 区 SP5012）	丸玉？	縄文晩期	1117	10-2-5	報告書に分析報告所収
A-2	徳永 A7 次	112725002	包含層（谷北部Ⅳ層）	小玉	古墳後期～終末	1227	59-8	報告書では分析結果に基づき天河石と記載
A-3	今宿 5 次	970800167	112 号甕棺（混じり込みの可能性有り）	勾玉？	弥生前期後半	654	22-167	報告書記載は「碧玉製」、市報 963 集に分析報告
A-4	免 3 次	071200414	溝（SD-02?・03　3 層）	小玉	縄文晩期～弥生初頭	1059	27-414	報告書に分析報告所収
A-5	有田 36 次	800840001	2 号甕棺墓墓壙	勾玉	弥生中期後半	96	73-12	報告書記載は「硬玉」、市報 963 集に分析報告
A-6	有田 35 次	800700738	住居址（SC-07）周辺	小玉	古墳中期	173	26-27	報告書記載は「ガラス」、新たに行った分析で判明
A-7	有田 106 次	853801075	住居跡（SC12）北端覆土	小玉	古墳後期	651	20-108	報告書記載は「ガラス」、新たに行った分析で判明
A-8	有田 152 次	895300015	住居址（SC12）	小玉	古墳後期	265	未図化	新たに行った分析で判明
A-9	諸岡 B3 ～ 5 次	741000175	貯蔵穴（C 区 6 号竪穴）	勾玉	弥生前期末	31	13-5	市報 1117 集の分析報告に類例として記載
A-10	高畑 10 次	843620060	溝（SD26）	小玉	古墳中期	115	未図化	新たに行った分析で判明
A-11	元岡・桑原 42 次	045111001	旧河川（D-3 区土器群 9C）	丸玉	弥生中期末～後期	1275	109-986	報告書記載は「ヒスイ」、新たに行った分析で判明
その他参考資料（硬玉 =J・石英？ =Q）								
J-1	三苫古墳群 B-8 号墳	001550004	古墳石室	大珠	古墳後期	773	232-13	市報 963 集に分析報告
J-2	三苫古墳群 B-9 号墳	001550013	古墳石室	小玉	古墳後期	773	237-6	市報 963 集に分析報告
Q-1	石ヶ元古墳群 28 号墳	965630469	古墳石室	管玉	古墳後期	744	159-20	報告書記載は「ガラス」、改めて行った分析で判明

※報告書の数字は「福岡市埋蔵文化財調査報告書」の集数

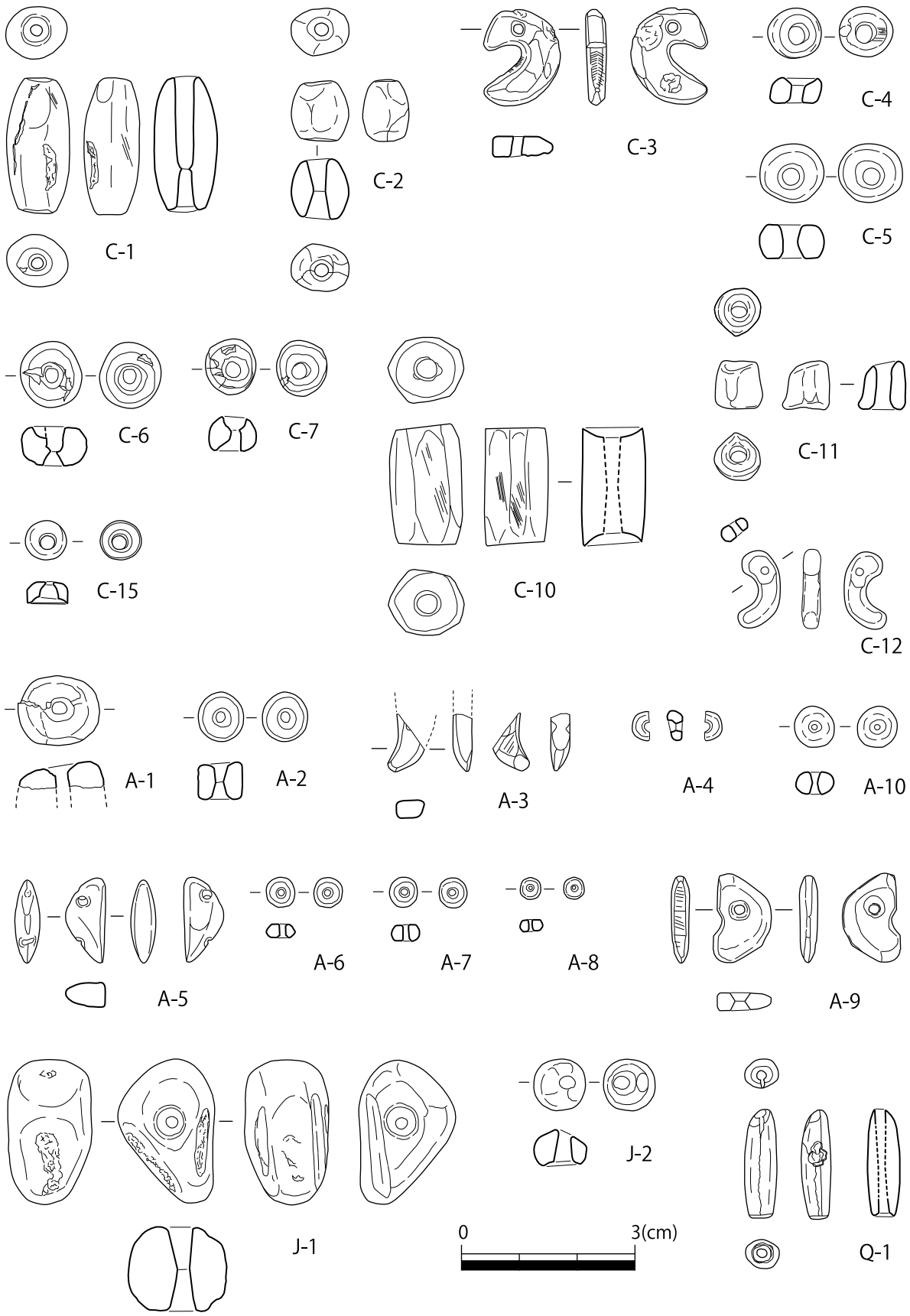


図２　福岡市内出土玉類の事例

※C-6、C-7 は原図からの再トレース、その他は新たに実測したもの

写真１　福岡市内出土玉類の事例

※基本は原寸大、2倍で表示しているものは原寸画像を一緒に提示している

２．中世イングランドにおけるペニー銀貨の材質調査

松園 菜穂・比佐 陽一郎
鶴島 博和（熊本大学名誉教授）

（1）はじめに

1）経緯

本調査は、中世ヨーロッパの経済史を専門とする鶴島が、イングランドの銀貨を研究対象として考えるなかで、比較的簡単に資料の材質調査を行える装置が福岡市埋蔵文化財センターに在ることを知り、協力を持ちかけたことをきっかけとする。

埋蔵文化財センターでは、日常的に埋蔵文化財の保存処理にかかる診断（事前調査）に各種の理化学機器を使用しているが、装置活用の可能性や利用頻度の拡大を模索しており、今回の協力要請を受け、分析を行ったものである。

2）調査の目的

7 世紀後半から 16 世紀前半まで、中世ヨーロッパにおいて基準通貨的な役割を担ったイングランドのペニーと称された銀貨（以下、銀貨）が存在する。この銀貨は、約 1000 年間という長期的な期間に渡り、人々に受容された歴史がある。

その背景について、銀貨に内在する情報として材質や意匠、形態、量目、製造元などがあり、外在的には中世イングランドの王国体制とヨーロッパにおける経済状況が想定される。これまで、上記の項目について歴史学的な検証が行われてきたが、銀貨そのものの材質に着目した科学的な調査は十分でない。

本報告では、7 世紀後半から 16 世紀前半までのペニー銀貨を対象として、銀貨の材質調査を実施し、銀貨としての質（品位）について検討した。また、材質調査の結果を踏まえて、歴史学的考察を行った。その内容を以下に報告する。執筆は、（1）から（4）を松園と比佐、（5）を鶴島が担当した。

（2）資料について

対象資料は、7 世紀後半から 16 世紀前半に打造されたペニー銀貨 60 枚と、比較資料としてその時期の間で発行された他地域の銀貨 32 枚、計 92 枚である。上記の資料は、共同研究者の鶴島所蔵である。

銀貨の組成の推移をみるために、中世イングランドの王国体制の状況を踏まえて４つの時期区分を設定した。

時期区分は、金貨が消滅した 7 世紀後半から 8 世紀後半の初期ペニー（c.675-c.750）、ピピン・シャルルマーニュの改革と連動した移行期ペニー（c.750-c.973）、エドガー以降の改革ペニー（c.973-c.1278）、そして 13 世紀後半以降の王権のより強い統制下におかれた後期ペニー（c.1278-c.1603）である。

（3）調査方法

本調査では、非破壊で材質の傾向を知るために、蛍光 X 線分析法を実施した。

蛍光 X 線分析法とは、文化財の世界では非破壊で材質の傾向を知るために用いられる広く知られた調査手法である。

励起 X 線を資料表面に照射すると、照射された部分に存在する元素が、元素固有の反射をする。反射した X 線を検出器で捉え、PC のソフトで換算することで、X 線を照射した範囲に存在する元素の種類がどれくらいの量存在するのか推定することができる。一般的に、元素の種類を知るための調査方法を定性分析、定性分析の結果をもとに元素の量を調査する方法を定量分析という。

定量分析には、大きく２つの方法があり、標準試料を用いる方法と標準試料を用いずに PC のソフトで濃度計算を行う方法（ファンダメンタルパラ

メータメソッド。以下、FP 法）である。今回の定量方法は、FP 法で行った。

使用機器は、福岡市埋蔵文化財センター設置の微小部領域用エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（AMETEK　EDAX 社製　Orbis）で、分析条件は以下の通り。

電圧：50Kv、電流：任意、対陰極：ロジウム、検出器：シリコンドリフト検出器、測定雰囲気：大気、測定範囲：1㎜、測定時間：120 秒。

（4）結果

今回の資料は、銀貨であることから主成分である銀（Ag）と銀貨の素材（銀鉱石、銀貨、銀製品）に伴う元素として銅(Cu)、鉛(Pb)、金(Au)、鉄(Fe)に着目した。

また、各時期の銀貨の分析点数が少ないことを踏まえて、今回の結果はその時代の大まかな傾向として捉えたい。

以上を踏まえて、材質調査の結果を、(1) 全体的な銀貨の組成の推移、(2) 時期区分における銀貨の組成の推移、(3) 他地域との比較という観点でみていく。

全体的な傾向として、長期的な期間銀（Ag）が安定して 90%を超える値を示していることが指摘できる（表 1）。

他地域における銀貨の分析結果（表 2）のバラつきが大きい点を踏まえると、ペニー銀貨の安定性は特異であると考える。

銀貨において、Ag 含有量が 90%を超えるというのが高品位を示す指標であるため、今回分析をした銀貨は高品位であると判断したい。

時期区分における銀貨の組成の推移を見ていくと、初期ペニーは 90%を超える値を示す。しかし、次の移行期ペニーでは、ある時点において時代を経るごとに銀(Ag) の減少が認められるが、銀(Ag) の含有量は回復する。改革ペニーに移るとそのバラつきはほぼなくなり、後期ペニーでは安定的に 90%を超える値を示している。安定して高品位を示しているが、ある時期において銀（Ag）含有量が下がる傾向が認められる。

その時期は、ヨーロッパ全体の銀の採掘量が下がる時期と重なるが、今回は同時代における分析点数が少ないため言及は控える。また、銀（Ag）の含有量が低い値を示す場合、反比例的に銅(Cu)が増える傾向が認められる。

その他の鉛（Pb）、金（Au）、鉄（Fe）については一定の挙動を示さないため今回は検討しない。

（5）考察

現在のヨーロッパを構成する地域（鶴島の私見では、文明の固体としてのヨーロッパは、11 世紀までに漸次的に形成された。但し、以下便宜的にヨーロッパとする）では、ローマ帝国の勢力が撤退した（西のローマ帝国の消滅は帝国の消滅ではなく東がローマ帝国となった）ポスト・ローマ期の 7 世紀後半に、それまでの、金、銀、銅による三貨体制から銀貨のみが流通する銭貨体制へと移行した。ここで銭貨という言葉を使用したのは、流通したのが一枚の「お金」と称されるペニー貨のみとなったからである。

イングランド（イングランドという言葉が現れるのは起源 1000 年頃であるがここでは便宜的に使用する）において、従来シャット貨と誤って称されてきた、小粒で厚さのある初期ペニー貨は、大陸の低地地帯の影響を受けつつ、ロンドンを中心とする東南部で盛んに発行された。とくに 700 年から 750 年まで発行された初期ペニー貨は、1135 年まで発行されたイングランドのどの銀貨よりもその量が多い可能性すらあるのである。従来ローマ帝国が撤退した後の初期中世が貨幣のない自然経済の世界であったという憶測は到底受け入れることはできない。しかし、当時のイングランドには、強力な王権は存在せず、地域権力や交易に携わる商人たちが、独自に発行したため、その意匠は様々であった。重さは、1 グラム程度あるいはそれ以下のものが多いが、極端な差はなく、相互に規制していたものと想像できる。

特筆すべきは、その品位の高さである。イングランドには、銀山は 12 世紀中ごろになるまで確認されていない。12 世紀のカーライルはかなり良質の銀山であったが、13 世紀までには枯渇してしまった。13 世紀のデヴォンシャーの銀山も短期的であった。この分析だけでも明らかなように、イングランドの銀貨は、良質な品位を維持し続けたのだが、いったい、その良質を保証した銀はどこから来たのか。現在、定説的な説明は、羊毛の輸出の対価として大量の銀が流れてきたというものである。確かに低地地帯・ライン川とイングランド東南部・テムズ川を結ぶ線は交易ベルト地帯であったことからも、この説明は受け入れやすい。

中世後期あるいは近世に至るまでの銀貨のモデルを決定したのは、973 年のエドガー王による貨幣改革であったといわれる。本報告では、初期ペニー貨と 973 年の間の銭貨を移行期と考えた。この時期に特色的なのは、北部における銀の相対的な枯渇によって、銅貨（スティッカ）が出現したことである（表の８と９）。ただし、銅貨の出現が商品貨幣流通の衰退とは直ちには断言できないのである。銀貨はかなり高額であり、低額銭貨の出現は、銭貨の日常交易での使用の可能性を示唆するからである。品位のディベースメントは、大陸おいてよく見られるが、地域的交易においては使いやすいという利点もあったであろう。

さらに、試料としたオッファとアルフレッドの銀貨（表の５と１１）は、その品位の高さにもかかわらず、現代の模造品（「偽造」としなかったのは現在流通しないからである）であろう。ヨーロッパの中世貨幣は原則として打造貨である。銀のコインに打型を打つことで作り上げる。したがって、図像の縁はシャープである。それが使用されるにつれて磨耗し丸くなる。この二つの銀貨の図像は依然として新品のようにシャープなのである。模造品の類で言えば、表の３２のウィリアム一世（1066 年―1087 年）のパックス貨は、明らかに当時の偽造である。銭貨製造人は Coc で場所は Romney で、当時の Romney 所在の銭貨製造人は Wulfmaer であるから Coc は流れの職人であろう。これまで偽造貨のまとまった資料はなく、その意味でのこの銭貨の金属組成は、当時の偽造貨がどのような金属を用いて作られたかを知る上でも貴重である。

973 年から 1158 年まで、イングランドの国王たちは、2 年から 6 年の間隔で銭貨の型を更新していった。その理由は徴税のためといわれる。王権への回帰の期待が、銀貨の品位を高いものとした。その一方で、ヴァイキングへの平和購入代として大量の銀貨が支払われ、スカンディナヴィアでその出土が続いている。彼らは、銀の地金として銭貨を利用した。彼らの広範な交易活動と、イングランドの銭貨がヨーロッパ、とくに北ヨーロッパにおける一種の基準通貨となっていったこととが関連があるのかどうかは、考察の対象としてよい課題である。

1158 年とくに 1180 年以降の銭貨の切り替えの時期が長くなっていったことは、イングランドの銀貨がますます通貨として機能していったことを示している。1180 年から 1220 年にかけて起こったといわれる、先駆的なインフレーションは、そのひとつの表現かもしれない。イングランドの銀貨は、ますます、中世ヨーロッパの基準通貨として機能していった。ロンドンと経済的に密接な関係にあった 13 世紀のケルン市での不動産売買にイングランドペニー貨が使われたことや、イングランドと政治経済的に関連の深い北フランスでイングランド銀貨の模倣貨（意匠は同じで銘が現地の支配者。したがって偽造ではない）が発行されたことは、それを示している。こうした基準通貨としての機能は、イングランド王権の存在理由でもある。強いペニー貨は、その財政軍事国家という特質を保証したのである。

675 年から 1603 年まで、イングランドの銀貨は、大陸と比較しても、銀の素材として、権力の象徴として、経済的な基準通貨として、時代時代の構造に即応しながら常に高い品位を維持していた。今回分析した試料は、イングランド史の基底

の流れをはからずも照射していたのである。

【参考文献】

松園菜穂・比佐陽一郎・鶴島博和 2018「中世イングランドにおける銀貨の組成について」『日本文化財科学会 第 35 回大会　研究発表要旨集』日本文化財科学会

Hirokazu Tsurushima, ‘Why could the silver Pennies Circulate as Currency in England, c. 973 to 1130s? Kingship, Silver and Moneyers ‘, Annales Mercaturae 3 (2017) , pp. 7-18.

Hirokazu Tsurushima, ‘The Moneyers of Kent in the long Eleventh Century ‘, in David Roffed (ed.) , The English and Their Legacy, 900-1200: Essays in Honour of Ann Williams (Woodbridge 2012) , 33-5

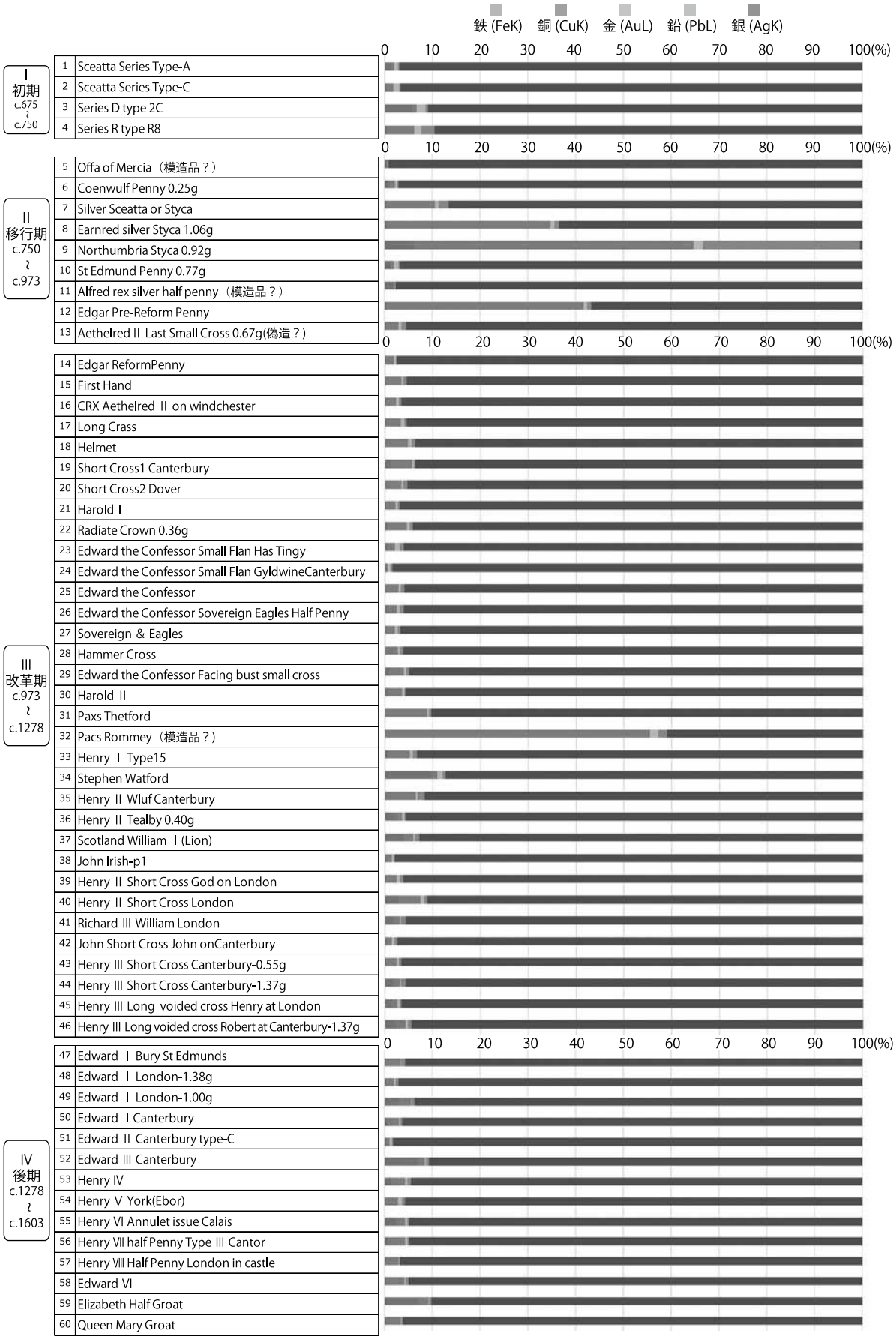


表１. ペニー貨の材質傾向

61	Sceatta Series Type-E-p01	大陸ヨーロッパ初期	675-750
62	Charles the Bald(840-877)	大陸	840- ?
63	Normandie Richard I(942-946)Denier au Fornton	大陸	942-946
64	Mainz Otto3	大陸ヨーロッパ	983-1002
65	Konrad II Koln	大陸ヨーロッパ	1027-1036
66	Frankreich:Maine Deniar.1036-M.13 Jahr	大陸	1036-
67	Normandie Robert II Denier	大陸	1087-1106
68	Alfouso I de Arogon dinero Toledo AB-23	大陸	1104-1134
69	Normandy henry I of England(1106-1135)Denier	大陸	1106-1135
70	レオン・カスティリア　アルフォンソ　VIII	大陸	1158-1214
71	Jaime II dinero Baredna CR-310.1	大陸	1267-1327
72	Fernando Valencia IV pepiou Sevilla	大陸	1285-1312
73	Jaime I Valencia CR-316	大陸	1238-1276
74	Archbishop Arles	大陸	12th cetury?
75	Ponthieu Province(Normandie) France	大陸	12th cetury?
76	Denier de Touraine	大陸	12th cetury?
77	Ooruado Alfonso XI Leon	大陸	1311-1326/27
78	Burgarian Ivan Alexander 1331-1371	大陸	1331-1371
79	Pedro IV diuero Aeagou	大陸	1336-1387
80	Aquitaine Sterling of Edward the Black Prince	大陸	C.1350
81	Jioven Alfonso XI Aviea	大陸	1352-1284
82	AefonsoX pepion:Burgos B	大陸	1352-1284
83	Abolo Alfonso XI creciente	大陸	1352-1284
84	クエンカ	大陸	15th century
85	ポーランド　ヤゲロ朝	大陸	15th-16th century
86	マリア・テレジア　銀貨	大陸	1783-
87	Abbasid Dirham ch Al-Rashid	イスラーム	786-809
88	Umayaad of Spain Abdal-Raman II	イスラーム	822-852
89	Samanid Dirham biz Ahmad	イスラーム	914-943
90	Almohadep millarep imitacion cristiana	イスラーム	?
91	Constantin II(Copper coin)	ローマ	337-340
92	Bizanz(Copper coin)	ローマ	395-

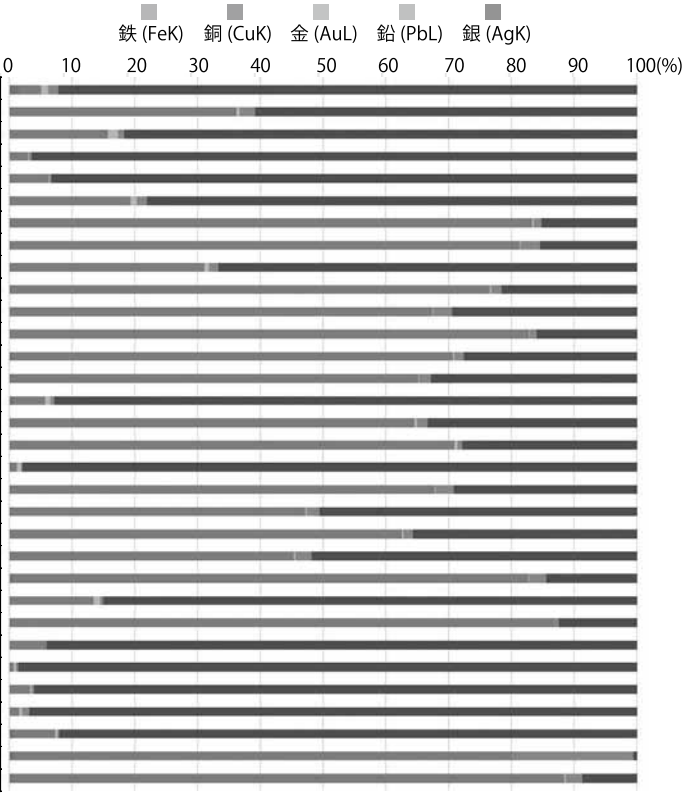
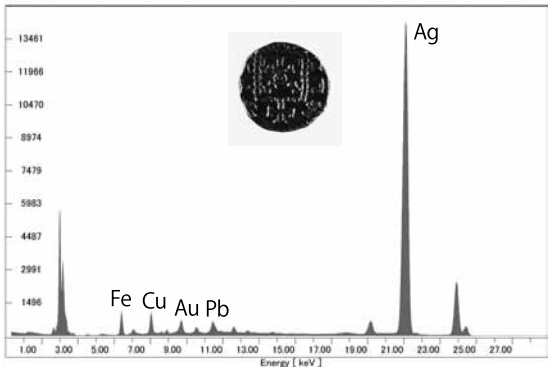
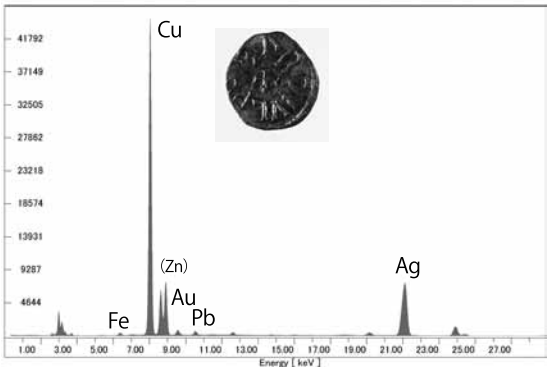


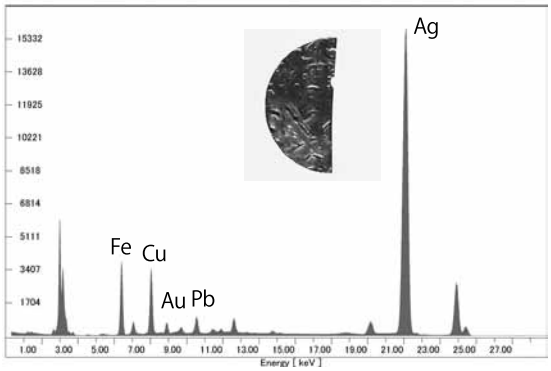
表２. 大陸で打造された銀貨の材質傾向



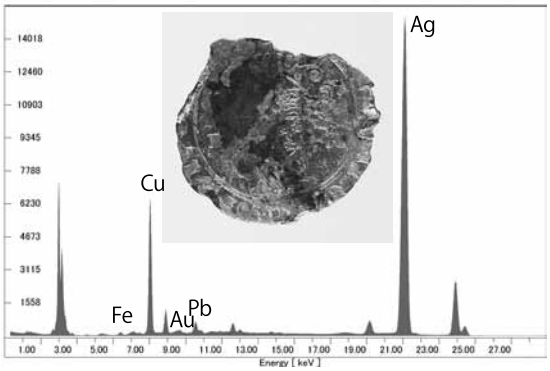
（1）初期ペニー
No.01　Sceatta Series Type-A



（2）移行期ペニー
No.08　Earnred silver Styca 1.06g



（3）改革期ペニー
No.37　Scotland William Ⅰ (Lion)



（4）後期ペニー
No.58　Edward VI

図１. ペニー貨の蛍光X線分析結果

Ⅲ　埋蔵文化財センターの概要

1．組織と職員

（1）福岡市文化財行政の組織

平成 24 年度の機構改革で，文化財部は経済観光文化局へ移管し，埋蔵文化財センターは所長のみ教育委員会と兼務となった。

文化財部の組織

文化財保護課	管理調整係	部の総括，予算・決算，庶務・経理，文化財施設の管理
	調査普及係	文化財保護審議会，文化財の調査，普及事業
	活用推進係	歴史文化基本構想の策定
史跡整備活用課	福岡城跡整備係	福岡城跡の調査・整備，課の庶務，福岡みんなの城基金に関すること
	鴻臚館跡整備係	鴻臚館跡の調査・整備
	史跡整備活用係	史跡の保存・整備・活用，文化財関係団体との連絡調整
埋蔵文化財課	事前審査係	公共及び民間開発事業に係る埋蔵文化財の事前審査及び周知
	調査第1係	主に東部地区における埋蔵文化財の発掘調査及び保存，課の庶務
	調査第2係	主に西部地区における埋蔵文化財の発掘調査及び保存，課の庶務
埋蔵文化財センター	運営係	埋蔵文化財の収蔵・保管・展示等，教育普及
	保存分析係	埋蔵文化財の保存・分析

（2）埋蔵文化財センターの職員（平成 29 年度）

所長　大庭　康時	運営係長　　龍　孝一	文化財主事　今井　隆博 文化財主事　大森　真衣子	嘱託　力武　卓治 （文化財教育普及専門員） 松園　菜穂 （保存処理指導員）
	保存分析係長　比佐　陽一郎	文化財主事　服部　瑞輝	

2．施設

（1）施設の概要

当センターは敷地面積 4,000㎡，鉄筋コンクリート造 3 階建（建築面積 1,050㎡，延床面積 1,992㎡）の規模で昭和 57 年 2 月に開館した。その後，昭和 61 年 3 月に収蔵庫を主とした増築（増築面積 1,035㎡，増延床面積 1,994㎡）を行った。さらに平成 9 年度から大規模な増築・改造を実施し，平成 11 年 4 月にリニューアルオープンの運びとなった。現在，敷地面積 7,481㎡，建築面積 3,987㎡，延床面積 10,713㎡の施設規模である。また，平成 28 年 3 月に取得した月隈収蔵庫は，敷地面積 24,974.68㎡，建築面積 8,347.93㎡，延床面積 8,639.47㎡である。

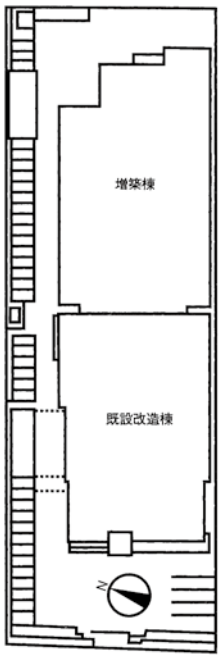
（2）施設の紹介

ホームページ（http://www.city.fukuoka.lg.jp/maibun/html）には施設の概要のほか，前年度の事業実績，年度毎の保存処理資料の紹介，収蔵遺物，展示品，講座案内などを掲載している。

主な施設

施設区分	室　　名	床面積（㎡）
教育普及	第１展示室	167.00
	第２展示室	127.00
	第３展示室	61.00
	研修室	140.00
	図書室・図書コーナー	181.00
	貸出準備室	85.00
	資料閲覧室	58.00
収　　蔵	収蔵庫	5,601.00
	特別収蔵庫	547.00
	記録類収蔵庫	192.00
	荷解・搬入室	65.00
	消毒室	23.00

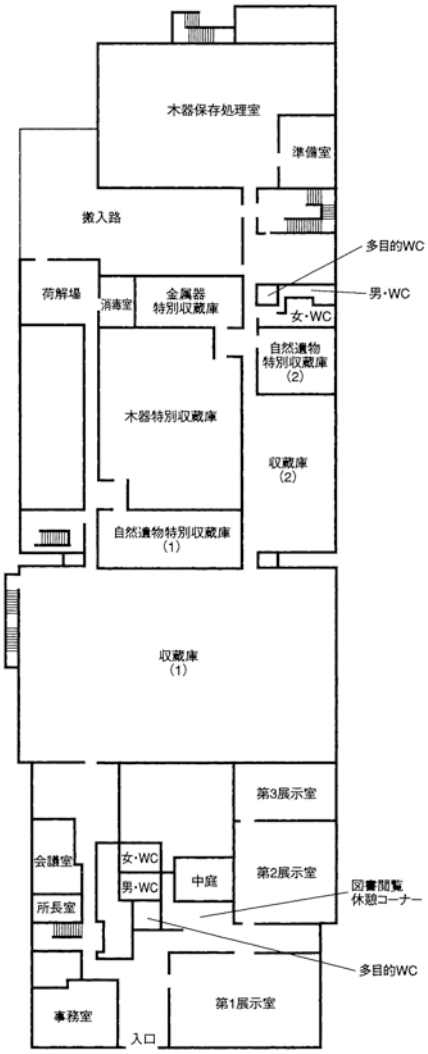
施設区分	室　　名	床面積（㎡）
保存処理	木器保存処理室	426.00
	金属器処理室	156.00
	分析室（光学機器室）	154.00
資料整理	洗浄室	37.00
	資料整理室	235.00
	写場・暗室	63.00
管　　理	倉庫	58.00
	事務・会議室等	140.00
	警備・機械室等	258.00
	通路・エレベーター等	1,434.00
その他	庇・トラックヤード等	505.00
計		10,713.00



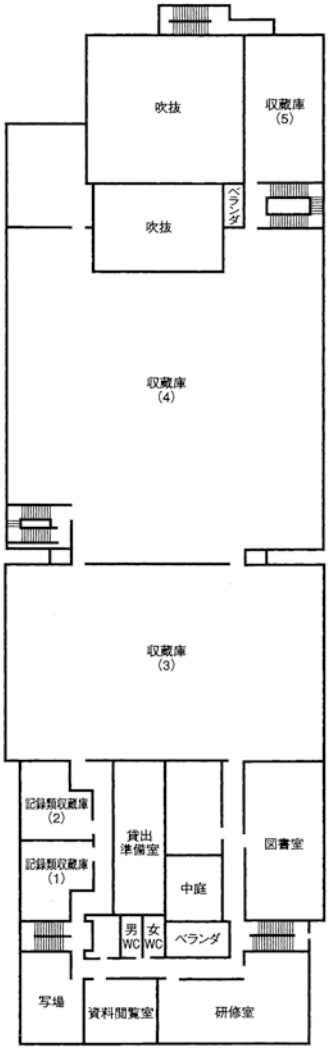
建物配置図 ▶

正面入口

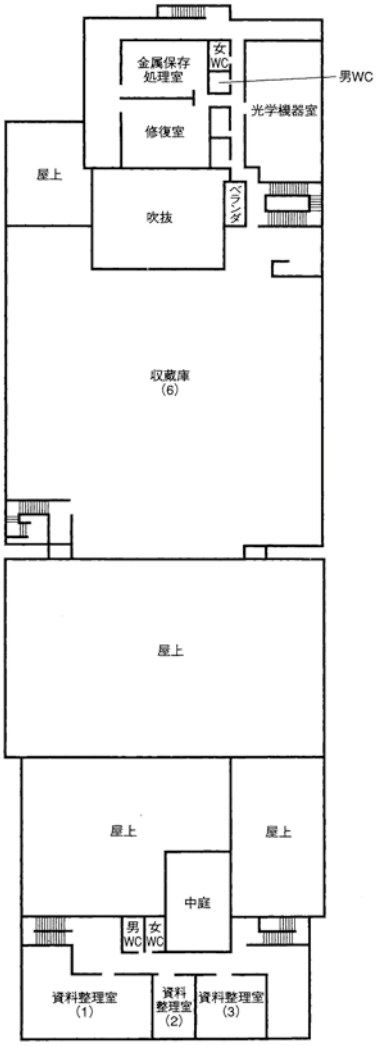
▼ 施設平面図



〔1階〕



〔2階〕



〔3階〕

付1　福岡市埋蔵文化財センター条例等

福岡市埋蔵文化財センター条例

（昭和56年12月21日 条　例　第66条）

（設置）

第1条　発掘調査等で出土した考古学的資料（以下「資料」という。）の保存と活用を図り、もって市民文化の向上に資するため、福岡市埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）を福岡市博多区井相田二丁目に設置する。

（事業）

第2条　センターは、次の各号に掲げる事業を行う。

(1) 資料の収集、整理及び保存に関すること。

(2) 資料を展示し、公開すること。

(3) 資料の専門的調査研究を行うこと。

(4) 前3号に掲げるもののほか、センターの設置の目的達成に必要なこと。

（職員）

第3条　センターに所長その他必要な職員を置く。

（入館の制限）

第4条　教育委員会は、次の各号のいずれかに該当する者に対し、入館を拒み、又は退去を命ずることができる。

(1) センターの管理上必要な指示又は指導に従わない者。

(2) センターの管理上支障があると認められる者

（資料の貸出し）

第5条　教育、学術若しくは文化に関する機関若しくは団体又は学術研究のため特に資料を利用しようとする者は、教育委員会の許可を受けて資料の貸出しを受けることができる。

２　前項の貸出しは、資料の保管について安全が確保できると認められる場合に限り行うものとする。

（損害賠償）

第6条　資料の観覧者又は貸出しを受けた者が、その責めに帰すべき理由によりセンターの建物若しくは施設又は資料を破損し、滅失し、又は汚損して本市に損害を与えたときは、これらを原状に復し、又はその損害を賠償しなければならない。

（委任）

第7条　この条例に定めるもののほか、センターの管理に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附　則

この条例は、公布の日から起算して3月を超えない範囲内において教育委員会規則で定める日から施行する。

（昭和57年教規則第3号により 昭和57年2月22日から施行）

福岡市埋蔵文化財センター条例施行規則

（昭和57年1月25日 教育委員会規則第4号）

（趣旨）

第1条　この規則は、福岡市埋蔵文化財センター条例（昭和56年福岡市条例第66号。以下「条例」という。）の施行に関し必要な事項を定めるものとする。

第2条　削除

（平成24教規則2）

（職員）

第3条　センターに所長を置く。

２　前項の職員のほか、特に必要なときは、その他の職員を置くことができる。

３　所長は、職員のうちから命ずる。

４　所長は、上司の命を受けてセンターの事務を掌理し、及び処理する。

５　その他職員は、上司の命を受けて分担する事務を処理する。

（平成24教規則2・全改）

（職務権限の代行）

第4条　所長に事故がある場合又は所長が欠けた場合において、特に事務取扱者を命じないときは、教育支援部長がその事務を行う。

（平成24教規則2・全改）

（開館時間）

第5条　センターの開館時間は、午前9時から午後5時までとする。ただし、教育長は、必要があると認める場合には、これを変更することができる。

（休館日）

第6条　センターの休館日は、次のとおりとする。ただし、教育長は必要と認める場合には、これを変更し、又は臨時に休館日を設けることができる。

(1) 毎週月曜日

(2) 12月28日から翌年1月4日まで

（入館者の心得）

第7条　センターに入館する者は、次の各号に掲げる事項を守らなければならない。

(1) 所定の場所以外の場所で飲食し、喫煙し、又は火気を使用しないこと。

(2) 騒音を発する等他人に迷惑を及ぼす行為をしないこと。

(3) 危険物又は動物を持ち込まないこと。

(4) 所定の場所以外に立ち入らないこと。

(5) 職員が行う管理上必要な指示又は指導に従うこと。

（貸出し）

第8条　条例第5条第1項の規定による資料の貸出しを受けようとする者は、福岡市埋蔵文化財センター資料貸出許可申請書（様式第1号）を教育長に提出しなければならない。

２　条例第5条第1項の規定による資料の貸出しの許可は、福岡市埋蔵文化財センター資料貸出許可書（様式第2号）を交付して行う。

（寄贈等）
第9条　センターに資料を寄贈し、又は寄託しようとする者は、教育委員会に申し出なければならない。
２　寄託を受けた資料の貸出しは、寄託者の承諾を得て行うものとする。
（委任）
第10条　この規則の施行に関し必要な事項は、教育長が定める。
附　則
この規則は、昭和57年2月22日から施行する。
附　則（昭和61年3月31日教規則第2号）
この規則は、昭和61年4月1日から施行する。
附　則（平成3年3月28日教規則第7号）
この規則は、平成3年4月1日から施行する。
附　則（平成4年3月30日教規則第3号）
この規則は、平成4年4月1日から施行する。
附　則（平成11年3月29日教規則第1号）
この規則は、平成11年4月1日から施行する。
附　則（平成19年3月29日教規則第8号）
この規則は、平成19年4月1日から施行する。
附　則（平成19年6月28日教規則第10号）
この規則は、平成19年7月1日から施行する。
附　則（平成24年3月29日教規則第2号）
この規則は、平成24年4月1日から施行する。

保存処理設備機器の外部使用許可基準

１．基本的使用許可基準
外部に対する保存処理設備機器の使用許可に際しては、下記の要件を満たすものであることを原則とする。
(1) 本市の保存処理業務に支障をきたすおそれがないこと。
(2) 文化財保護の観点から重要性があり、本市の文化財保護行政に寄与するものであること。
２．その他の使用基準
(1) 使用は、センター職員の指導・助言のもと、原則として外部担当職員が行うものとする。
(2) 使用に際して必要となる原材料・作業員等は使用者側（外部）の負担とする。
(3) 一括委託等請負的な処理は許可しないこととする。
(4) 民間業者等営利を目的とする団体からの依頼については許可しないこととする。
(5) 緊急性のある場合や特殊なものを除いて、通常の保存処理については受け付けないものとする。
(6) 使用に際しては、事前にセンター職員と協議のうえ申請書を提出し、許可を得ることを必要とする。
(7) 使用にあたってはセンター職員の指示に従うこと。また指示以外の行為により機器を破損した場合は、使用者側の責任において原状回復すること。
３．対象機器一覧
本基準を適用する保存処理機器は、別表一覧表のとおりとする。
４．許可基準の理由　（略）

本基準は平成12（2000）年3月1日より施行する。
（別紙）＊主な保存処理機器の品名のみを列記
大型PEG含浸槽、一体型PEG含浸槽、真空凍結乾燥機、小型真空凍結乾燥機、有機遺物処理装置、減圧含浸装置、工業用電子天秤、偏光顕微鏡、実体顕微鏡、ビデオマイクロスコープ、赤外線カメラ、画像ファイリング装置、分析用電子天秤、赤外線分水計、大型滑走式ミクロトーム、蛍光Ｘ線分析装置、微小部蛍光Ｘ線分析装置、Ｘ線回析装置、走査電子顕微鏡、顕微赤外分光光度計、透過Ｘ線撮影装置、分析用試料作成装置、マグネチックスターラー、ドラフトチャンバー、精密噴射加工機（エアブラシ）、精密グラインダー、送風定温乾燥機、大型送風定温乾燥機、真空乾燥機、卓上電気炉、純水製造装置、超音波洗浄機、真空デシケーター、攪拌機、真空脱泡用デシケーター、シーラー、バキュームシーラー、ホットエアーガン

埋蔵文化財センターにおける有料複写サービス取扱い要項

（目的）
第1　この要項は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、埋蔵文化財センター図書室所蔵発掘調査報告書等行政資料のサービスを行う際の取り扱いについて、必要な事項を定めるものとする。
（複写サービスの申し込み）
第2　複写サービスの申し込みは、口頭で受けるものとする。
（複写手数料）
第3　複写サービスについては、福岡市手数料条例（昭和35年条例11号）第2条第2項に基づき実費を徴収するものとし、その複写サービス料金は次のとおりとする。なお、手数料については利用者が見やすいところに掲示するものとする。
(1) 用紙の規格は日本工業規格Ｂ列5番からＡ列3番までとし、1枚につき10円とする。
（複写手数料の納入等）
第4　行政資料複写の申し込みがあった場合は、申込者に対して複写手数料の金額を告知し、現金による納入を受けた後、金銭登録機で打出しした領収票又は現金領収帳による領収書を交付するものとする。

附　則
この要項は平成12年4月5日から施行する。
この要項は平成14年8月1日から施行する。
この要項は平成15年1月7日から施行する。

平成 29 年度福岡市埋蔵文化財調査報告書・年報一覧

第 1329 集　有田・小田部 58 —有田遺跡群第 263 次調査の報告—（調査番号 1546）
第 1330 集　五十川遺跡 8 —五十川遺跡第 20 次調査の報告—（調査番号 1609）
第 1331 集　五十川遺跡 9 —五十川遺跡第 21 次調査の報告—（調査番号 1634）
第 1332 集　雀居 11 —雀居遺跡第 19 次調査の報告—
　　福岡空港滑走路増設事業に伴う埋蔵文化財調査報告（1）（調査番号 1619）
第 1333 集　雑餉隈遺跡 9 —雑餉隈遺跡第 21 次調査報告—（調査番号 1542）
第 1334 集　千里大久保遺跡 1 —千里大久保遺跡第 1 次調査の報告 —（調査番号 1615）
第 1335 集　都地遺跡 6 —第 9 次調査報告—（調査番号 1547）
第 1336 集　那珂 77 —那珂遺跡群第 161 次調査の報告—（調査番号 1614）
第 1337 集　那珂 78 —那珂遺跡群第 167 次調査の報告—（調査番号 1629）
第 1338 集　博多 158 —博多遺跡群第 202 次調査報告—（調査番号 1430）
第 1339 集　博多 159 —博多遺跡群第 205 次調査報告—（調査番号 1601）
第 1340 集　博多 160 —博多遺跡群第 206 次調査報告—（調査番号 1608）
第 1341 集　博多 161 —博多遺跡群第 207 次調査報告—（調査番号 1611）
第 1342 集　箱崎 52 —箱崎遺跡第 70 次調査報告—（調査番号 1405）
第 1343 集　箱崎 53 —箱崎遺跡第 71 次調査報告—（調査番号 1415）
第 1344 集　箱崎 54 —箱崎遺跡第 72 次調査報告—（調査番号 1442）
第 1345 集　箱崎 55 —箱崎遺跡第 43 次 ·77 次調査報告—（調査番号 0356・1519）
第 1346 集　箱崎 56 —箱崎遺跡第 78 次調査報告—（調査番号 1538）
第 1347 集　比恵 79 —比恵遺跡群第 139 次調査の報告—（調査番号 1516）
第 1348 集　比恵 80 —比恵遺跡群第 141 次調査の報告—（調査番号 1541）
第 1349 集　比恵 81 —比恵遺跡群第 142 次調査の報告—（調査番号 1603）
第 1350 集　比恵 82 —比恵遺跡群第 143 次調査の報告—（調査番号 1613）
第 1351 集　比恵 83 —比恵遺跡群第 144 次調査の報告—（調査番号 1616）
第 1352 集　比恵 84 —比恵遺跡群第 145 次調査の報告—（調査番号 1617）
第 1353 集　比恵 85 —比恵遺跡群第 147·108 次調査の報告—（調査番号 1633·0636）
第 1354 集　元岡・桑原遺跡群 29 —第 42 次（5）・52 次調査の報告—　（調査番号 0451・0763）
　　九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書
第 1355 集　元岡・桑原遺跡群 30 —元岡古墳群Ｇ - ６号墳・庚寅銘大刀の考察—（調査番号 1043）
　　九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書
第 1356 集　元岡・桑原遺跡群 31 —第 49 次・第 51 次・第 57 次・第 62 次・第 65 次調査の報告—
　　九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書
第 1357 集　史跡 鴻臚館跡 鴻臚館跡 24 —総括概要編—

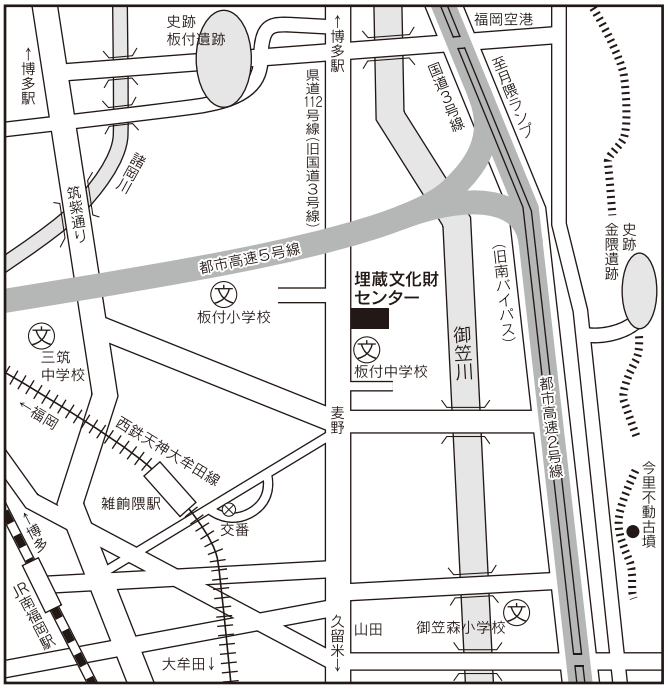
福岡市埋蔵文化財年報 VOL.31 —平成 28（2016）年度版—
　　谷遺跡第 4 次調査（調査番号 1626）
　　福岡城下町遺跡第 2 次調査（調査番号 1631）
　　南八幡遺跡第 20 次調査（調査番号 1637）
　　博多遺跡群第 49 次調査（調査番号 8916）
　　博多遺跡群第 92 次調査（調査番号 9954）
　　宮ノ浦畑中遺跡第 1 次調査（調査番号 1548）

福岡市埋蔵文化財センター年報　第37号
2018年12月27日
発　行　　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
印　刷　　大成印刷株式会社
福岡市博多区東那珂3-6-62

FUKUOKA CITY ARCHAEOLOGY CENTER

Annual Report

No.37
2018



福岡市埋蔵文化財センター

所 在 地　〒812-0881　福岡市博多区井相田（いそうだ）2丁目1-94

電　　話　(092)571-2921　　FAX.(092)571-2825

開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休 館 日　毎週月曜日・年末年始（12月28日～1月4日）

入 館 料　無料（ただし団体見学の案内は事前に連絡が必要です）

交通手段　■西鉄天神大牟田線　雑餉隈（ざっしょのくま）駅から徒歩15分

■JR鹿児島本線　南福岡駅から徒歩25分

■西鉄バス　博多バスターミナル12番のりばから

行先番号 41番のバスに乗車約30分

板付中学校前（埋蔵文化財センター前）下車すぐ

ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　http://www.city.fukuoka.lg.jp/maibun/html/

平成29年度　福岡市埋蔵文化財センター年報　第37号

2018　福岡市教育委員会